
SALUS サルス

遠山 玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SALUS サルス

【Nコード】

N8951W

【作者名】

遠山 玉

【あらすじ】

医大生の永淵雨中をスカウトに来たのは、国際的な特別支援学校【サルス学院】のゼルダ・ドートリーという女。雨中は不信に思いながらも彼女の誘いに乗り、教師としてサルス学院に赴任することになった。だがサルス学院で雨中を待っていたのは、彼の想像を超える『障害者』の少女ばかり。『対人恐怖症』 西原日景、『味覚障害』 宮越夜光、『ギフトッド』 佐伯樹里。常に自分に降りかかる障害は押し倒して生きてきた雨中は、『障害』を持ち生きていく彼女たちと出会うことで自身の生き方を徐々に見つめ直し

ていくのだが……。

鍋の代わりになるものを探しに行ったらステンレス製のポウルを見つけた。ペットボトルの水をその中に投入し、海岸にあった手頃な岩で作った簡易竈の上におく。火薬とライターを使い、ポウルの下に予め敷いていた枯れ木に火を点け数分、水が沸騰。

骨のついた生肉をナイフを使って分離させた後、肉のほうをポウルに投入する。骨をどうしようか迷ったが、なんとなく出汁でも取れるんじゃないかと思い、これもやっぱりポウルに投入した。

ナイフで骨と肉を分けた意味は……まあ、途中途中その骨を使ってポウルの中身をかき混ぜてたところを考えると、おそらくはあったんじゃないかと思う。

塩を入れ、醤油を入れ、その他適当な調味料をポウルに流しこみ肉汁らしきものが完成。

汁が、肉に残っていた血の色と醤油の黒色が混ざったようないかにも体に悪そうな色をしていたが、特に気にもせず、用意していた紙コップに掬い試食。

不味い、

戻しそうになったのを、左手で口を抑えなんとか止める。

想像していた以上の不味さと気持ち悪さが味覚を襲い、吐けと命令してきた。

吐け、吐け、吐け、吐け。

戻せ、戻せ、戻せ、戻せ。

海水を超えるような塩分濃度の汁と、肉が舌に触れた瞬間に味わった奇妙な感觸。噎せ、逆流してきたものが鼻から体外に出てこようとす。それでもなんとか、自分自身を説得し、飲み込ませるところに成功。

しかし紙コップの中身は空になったが、まだその十倍に近い量がポウルの上に待ち構えていた。

嫌になるな。

……口からそう漏らしたが、捨てるわけにはいかなかった。

空腹状態にあるわけでも、食べ物を粗末にしてはいけないという精神があるわけでもない。本当ならこんなもの捨ててしまいたい。

だが、この料理、とりわけ、この肉に関しては絶対に完食しようと心に決めていた。

馬鹿馬鹿しいことだとは理解している。他所から見たら滑稽な光景だろう。

しかし、こいつには今まで長いこと世話になったのだ。その存在を、生き残るためだからと言って無闇に切り捨てるわけにはいかない。

ならせめて、せめてもの償いとして、体内に取り込んでやるのが筋ってもんじゃないだろうか。

新しいペットボトルの蓋を開け、水を飲む。口の中を一度洗い、覚悟を決めた。

ポウルの中身を、今度は紙コップではなく陶器でできた大きめの容器に移す。

ポウルの中には骨だけが残った。

容器を手に取り、口に近づけていく。

何も考えず、容器に口を持って行き、口の中に流しこむように容器を傾けた。

感想はさつきと一緒だった。

豚肉、牛肉、鶏肉、羊肉、馬肉、魚肉、エトセトラ。人間が口にする肉の種類なんてのは、それこそ数知れず存在するだろうが、お

そらく絶対、生きているうちには食べないであろうこの肉の味は、トラウマでも植えつけてくれそうなくらいの口に合わなさを備えている。紙コップ一杯分のときは、味覚が感じ取る刺激の量が違う。先ほどとは別の感想、「まずい」というよりも「食べたくない」というのが新しく出てきた。

鼻を摘み、口を抑え、体外への逆流の経路を塞ぐ。

さつきと同様に噎せ、あたかも牛のように「飲み込む」と「戻す」を口の中で強制的に繰り返される。

その場で蹲り、一度無理やり飲み込む。今度は「戻す」という行為を実行させないよう、自分で自分の首を占めた。窒息しそうになるまで占めたが、生存本能が上手い具合に働いてか、丁度良い感じに逆流を防いでくれ、完全に飲み込むことができたようだ。

ポウル一杯を無理やり流し込んだのは今更ながら馬鹿な行動だと思ったが、この行動はどうやら正解のようだ。少なくとも、牛のよくな行為は止まった。

鏡があつたら自分の顔を見てみたいな、と鼻と口を覆ったせいで胃液やら鼻水やらよく分からないものがべつとりと付いた左手をみてそう思った。捨てるわけにはいかない、と意気込んでおきながら、やっぱり少しは体外に漏れている。

だが許容範囲だ。勝手にそう思い込むことにした。

ペットボトルの水で口を濯ぐ。多少は楽になったが、どうしても食べた後の違和感が拭いきれなかった。変な肉を食ったという精神面でのダメージも大きい。おそらく今後、なにかの肉を食べる度にこのことを思い出すだろう。

もっとも、『今後』などというものがあればの話だが。

ポウルに残った生肉の骨を手に取り、試しに齧ってみるが、やっぱり噛み砕けなかった。砕いて少しずつ喰うか？ 塩にある程度漬けて火にかけてみるか？ 魚の骨と同じような調理法をいくつか頭

の中に入れてみたが、先ほどの肉汁もどきを思い出すとどれも実行に移す気になれなかった。

結局、アルミホイルに包んで近くに置いておくことにした。

『今後』というものがもしあったら、記念に骨をダイヤに変えるとかいうアレをやってみたいと思う。

「……まあ、どこでやってくれるのかは知らねえけど」

1 (後書き)

1960年代にニューギニアでは「クールー」という名の病気が多く発症しました。これに感染すると手足が震えや方向感覚の欠如を引き起こし、さらには痴呆の症状が出てきてしまいます。

クールー患者のほとんどの人が発症して二年の内に肺炎や褥瘡などの感染症によって死亡しています。

ニューギニアで流行したクールー病の原因ですが、それに関してはここに記すのは遠慮させていただきます。

さて、話は変わりますがこの男が食べた肉は一体なんの肉なんでしょうね？

西原日景。サルス学院に来て一番最初に説明されたのは、仕事の内容でもなく施設の詳細でもなく彼女の事だった。西原日景は学院の生徒で、抱えている障害は【対人恐怖症】。学院においてはレベル1に分類される程度の症状を持つ娘だ。授業には出席せず、常に学院寮の自分の部屋で時間を過ごしているとまで説明された。要はヒキコモリだ、と言いくるめたいところだが、彼女の対人恐怖症はかなり重篤のようで、例えば授業に出ようものなら……と言っより、他人と関わろうものなら失神、痙攣、過呼吸といった発作的な症状が拒絶反応として現れてくるらしい。厄介以上に禍々しく聞こえたが、それ以前にどうしてその話を俺にしたのか、この時はまだわからなかった。

俺は医大生ではあったが、専攻はあくまで『医療工学』であって『医学』ではない。同じ医大の学部であっても俺の属している学部は『医療』よりも『工学』に重きがある。だから患者のカルテを見ても理解はできないし、聴診器を持っても症状を判断するなんてことはできない。医療に関することで出来ることとすれば、それはレントゲンやMRIといった機械を操作したり、あとは義肢や装具の類を調整することくらいだ。つまり治療の下準備や後処置はできたとしても、俺には『治療』そのものをすることは出来やしない。

応急処置の仕方くらいなら一応は心得ているが、それが西原日景に対応できるかと聞かれたら答えはノーだ。……て言うか、そもそも対応したくない。真っ先に学院のことよりも彼女について説明しだしたのは、恐らくまあ俺が彼女に関わるフラグとして働くのだからうけど、もし出来るのであれば御免被りたかった。面倒臭いというのもあるが、何か嫌な予感がする。

数少ない友人である中間あぐりは、そもそも悪い予感がするのだからサルス学院には行くべきではないと助言してくれてた。大学で唯

一の知り合いといえる斎藤柳緑は、治外法権が適用されるサルス学院では日本の警察は誰も助けに行くことは出来ないと忠告してくれた。サルス学院にて俺の相談相手ともいえる宮越夜光は、責任が持てないのなら学院の生徒とはあまり交流を持たないほうがいいと切言してくれた。

俺はそういつた言葉には大抵同意していた。そもそも他人を気遣う程、俺は善良な人間ではない。基本的にはエゴイストで、医大生ではあっても結局は不良少年の成れの果てに過ぎない。医大に行つたのだから、医者になつて誰かを救いたいとかそんな背中が痒くなるような想いからでは一切なく、純粹に自分の利益のためだけに取つた行動だ。そりゃあ、突発的な想いから善行に走つたことも無くはないが、そんなもんは例えるなら『蜘蛛の糸』の作中でカンダタがやつた程度のものでしかない。俺は地獄には堕ちたくはないので馬鹿みたいに人を殺したり傷つけたり悪行を働く気はないが、だからといって自主的に善行に走る気も微塵としてなかった。

嫌な予感のする方へ進むほど、俺は危機管理ができない馬鹿じゃない。サルス学院には高給に眼が眩んで来てしまったが、それでも引き際は弁えている。いざとなりや辞表ぐらい出すさ。

……………そのつもりだった。

もしかしたら俺は気づくべきだったのかもしれない。

人間の「嫌な予感」ってやつが、はたして人間がどういう時に感じるものなのかを。

結局、俺は西原日景に自分から最後まで関わってしまった、あの時どうして真つ先に彼女の話がされたのかを知ることになる。それまでの過程で、俺は西原日景だけでなく宮越夜光や佐伯樹里といった様々な『障害』を持つ少女達と出逢い、彼女たちの秘密を知ったり、地獄行きが確定するような行為を取ったり、死にかけたりもするのだが、それでも、生き方を考え直すという珍しい機会には巡り合え

たように感じた。

正直、割りに合わない買い物をしたとも今でも思ってはいるが、それは今後の人生で還元していくことにしよう。今はとりあえず、これまでの話の中には出てこなかった、俺をサルス学院に導き、西原日景について真っ先に説明してきた、今回の出来事の全ての元凶となる人物について。

サルス学院人事部部長、ゼルダ・ドートリーという女の話から始めさせてもらおう。

1 (後書き)

マイナス的イメージを避けるために「障害者」ではなく「障がい者」と表記するような動きが数年ほど前から広がっています。

これに関しては様々な賛否両論があるようですが、私的意見としては現実から目を逸らさせないためには「障害者」と表記するべきではと思っております。

「障害者」「障がい者」以外にも「チャレンジド」という海外の言葉をそのまま用いる例もありますが、この話の主人公はそこまでポジティブな思考の持ち主ではないので、「チャレンジド」の言葉の意味を考えると使用する気にはなれませんでした。

この小説では今後も「障害者」と表記させて頂きますことをご了承ください。

「永瀧雨中様でございますか？」

眼帯。

そう、眼帯だ。

ドラッグストアとかで売ってるような医療用の白いやつじゃなくて、海外の戦争映画で目を負傷した兵士とかが着けてそうないかにも「眼帯」っぽい黒いやつ。目に当てる部分が半円のタイプで、そこに多少ばかり金色の刺繍が飾り付けられてあった。

その眼帯を右目に付け、女性物の黒いビジネススーツを着た謎の女が、道に停めてあった車からいきなり出てきて、俺に近づくなり先ほどの言葉で尋ねてきた。

この俺、永瀧雨中に。

く様、までつけて。

女が出てきた車は、俺が大学からの帰り道として一番よく使う道に停車していた。車は日本車ではなく海外メーカーの物でハンドルも右にはなく左にある。車に他に乘っている奴がいないところを見ると、女一人で運転してきたのか。

歳は恐らく二十代後半。喋った言語は完璧な日本語だったけど、ほぼ間違いない外国人。背中まで垂れた長い髪の色と隠れていない方の瞳の色が銀色に輝いていた。

女性にしては背が高く、全体的なスタイルもいい。モデルのような体型だったが、着ているビジネススーツとの相性からか、なんとなく秘書のようなイメージを感じ取れる。

そんでまあ、当たり前だけど知り合いじゃない。こんな奴知らないよ俺は。

「……どちら様？」

眼帯にしろスーツにしろ、やけに黒という色がこの女には似合っている。髪の色も銀色とは言ったが、その髪の中にはところどころ

に黒い髪も覗いていた。

イメージカラーは黒。

仏教じゃ黒色は「地獄」を意味するんだっけな。

怪しさ満点。

ポケットに突っ込んでいた手をとりあえず外に出した。

「少々お待ちを」

女は個性の無さそうな喋り方でそう言うと、手に持っていた鞆から何かを取り出そうとした。

なんとなく『S & W M36』あたりの手頃な拳銃が出てきてそのままパンツと撃たれそうな気もしたけど予想は外れた。当たり前だ、とツッコミを食らうかもしれないけど、この外人女なら防犯用だとか適当な理由で本当に持ってそうな気がするんだよな。

出てきたのは何かが入ったプラスチックのケースだった。

……トランプのケース？

女はケースから一枚なにかを取り出し、傷や汚れがないか確認してからそれを俺に向けてきた。長方形で硬そうな紙質のそれ。なんとなく手裏剣にもつかえそうだけど……ああ、名刺か。

「わたくし、こういうものと申します」

お決まりのような言葉を添えて、俺に手渡される一枚の名刺。

「どうも」

丁寧に両手で渡されたけど、俺は左手で受け取る。

『S A L U S S C H .

Z E L D A D A U G H T R Y

C h i e f o f P e r s o n n e l D e p a r t m e n

t

』

……読

めねえ。

「私はサルス学院で人事部部長をやっております、ゼルダ・ドート

リーと申します」

ああ、読めた。

SALUSで「サルス」。SCHはSCHOOLの略で「学院」。二行目は名前。これで「ゼルダ・ドートリー」と読めばいいのか。三行目は「人事部の部長」という意味になるのか。なるほどなるほど。

……………んで？

「そのサルス学院の人事部部長さんが俺になんのようですか？」

『サルス学院』。

そついう名前の学院があることは知っている。

身体的または精神的な『障害』を持つ子供を専門に受け入れ、社会的自立を目的とした授業を施すための教育機関。特別支援学校の一種。

通常の特別支援学校と違うのは、それらの『障害』の治療、研究も同時に行う医療機関としての二面性を持っているというのもあるのだが、なにより特徴的なのはもっと別のところにある。活動の規模だ。

それがなんと国際規模なのだ。

交換留学生の制度を執っているとかそんなのではなく、学院そのものが世界中に点在してあって、その全てで先に述べたような教育と医療を障害者の子供たちに対して行っているらしい。

『MSF』というのを知っているか？

『国境なき医師団』とでも言えば分かるかもしれない。

間違っている点はいくつかあるだろうが、サルス学院の活動とはMSFの活動に「教育」を加えたものだと考えてくれればわかりやすいと思う。

「永瀧様はサルス学院の名前はご存知だったでしょうか？」

俺の言葉から何を読み取ったのか、女 「ゼルダ」だったか

はそんなことを言ってきた。質問を質問で返すなよ……………なんて説教は置いてくとして、ここは普通に返す。

「ええ、まあ大学で教えられる程度には」

サルス学院の名前は日本じゃそこまで知られていない。知っているのは学院関係者を除けば、多少なりとも医学に関わっている人が、ネットで「特別支援学校」という単語を検索し、某オープンコンテンツ百科事典のサイトに行き着いたことがある人くらいだ。

俺は場合は前者。

英語は得意じゃないけど、これでも一丁前に医大には通っている。俺って医大生だぜ！……なーんて自慢する気には、所属している学部学科がアレなもんだからあまりなれない。名称を略せば「東大」になる大学に通っている学生が「俺って東大に通ってるんだぜ！」って言ってるようなそんな気分になる。

まあそんなわけだから、一応医大生である俺は、一応サルス学院についての知識はあるのだ。

「それで？ サルス学院が何のようですか？」

急かすように俺は再度聞いた。

ぶっちゃけ他人と話す時のこの言葉遣いは疲れんだよ。社交辞令で丁寧に喋っちゃいるけど、本音はさっさと普通の口調に戻したい。つーかさっさと帰りたい。

考えてみれば今日は大学四年生としての一日目が始まった大事な日だ。講義も初日からあり、課題となるレポートも大量に出されている。ただでさえ二年の時にサボりまくったツケが残ってるっていうのにこのままじゃ本当に卒業できなくなりそうなので、いい加減にこの女が本題に入ってくれないようなら早々に逃げ出そう。まだ会って三分と経ってないんだけどな。

「では……」

と、俺の気持ちが届いたのか、サルス学院人事部部長ゼルダ・ドートリーはその一言を置いて、続けてこう言った。

「……スカウトに来ました」

俺は逃げ出した。

2 (後書き)

「永淵 雨中」 Nagabuchi Uchu

年齢：23 身長：181cm 体重：82kg

「ゼルダ・ドットリー」 Zeida Daughty

年齢：27 身長：170cm 体重：54kg

直接寮には帰らず、晩飯の材料を買うためにスーパーに向かった。別に弁当を買って家で食うでもよかつたんだが、昨日も一昨日も三食ともに弁当だったので、たまには料理でもしなければなと思い頭の中でメニューを考える。思いついたのはナポリタン。スーパーに着くとまず目の前にあった野菜コーナーでピーマンを一袋カゴに入れる。次に肉のコーナーに行きソーセージを探した。豚肉、牛肉、鶏肉、羊肉、馬肉、魚肉、エトセトラ。色々な肉は見つかったがソーセージが何故が見つからなかった。近くにいる店員に聞いてみると、どうやらコーナーから外れたところに置いてあるらしい。そちらに向かう前に合いびき肉が安く売っていることに気づいたので、300グラムのものをカゴに入れた。ピーマンの肉詰めにもしよう。ソーセージのコーナーに着くと一番安いものを二袋手に掴んでカゴへ。最後にパスタを見つけてレジに向かい、金を払って店を出た。スーパーは寮から歩いて一キロほどの距離なのだが、その間は結構な坂道となっているので行きと帰りではかかる時間が異なる。厳しいのは帰り。タクシーを使いたくなる欲求を抑えて、体重八二キログラムの身体を動かしながら俺は帰路についた。

寮に着くと、ゼルダ・ドートリーが門の前にいた。

「こんにちは」

「……………」

「……まーいるよな。」

「そりゃいるよ。」

帰り道で待ち構えてくれるくらいなんだから、住所くらい調べてあるだろうよ。

「お話だけでも聞いては頂けませんでしょうか？」

特にか細くもなく、どちらかと言えば事務的な口調でゼルダは言った。

これがもう少し柔らかい口調だったら、眼帯であることを考慮しても怪しまれずには済む気がするのだが、この女は特に自分を取り繕おうとはしないようだ。

パーソナリティを大事にしているのは尊重するが、社会的にはダメだぞそれ。

「時は金なりって言葉知ってるか？」

俺は口調をいつも通りに戻した。

社交辞令終了。

やっぱパーソナリティは大事だよな。

「あんたと話しても俺にはなんのメリットも無いんだよ」

サルス学院は特別支援学校、すなわち障害者のための学校だ。

障害者の子供が教育するのに適した設備を整えるのには、非障害者の子供の時に比べて十倍近い金がかかる。盲目の子供のために点字の教科書を特別に用意するのとか、車椅子の子供のためにエレベーターを設置したりだとかそういう金だ。

そういう金が掛かるからこそ、国内の特別支援学校は年々規模が縮小してきているし、外国の国々によっては特別支援学校というもの自体が無かったりもする。

だからサルス学院の国際的なその活動には、それなりの大義があるんだろう。NPOに所属していないにも関わらず、おそらくはNPO並に人が助けられている筈だ。

……その筈だろうが、だからといって俺の知ったことじゃない。人を助ける、なんて面倒くさそうな仕事は俺には向いてはいない。そういう仕事はそういう事をしたと思う人間にやらせればいい。

俺は医大生で、そういうたところに所属している以上、間接的には人を助けているかもしれないが、しかしそれでも、俺はそんなことを思いながら勉強をしているつもりは毛頭無い。

断言してやる。全ては俺自信のためだ。

照れ隠しの要素なんていうものも、そこには一グラムもしてない。
「それじゃ、さいなら」

俺はゼルダを無視して門をくぐり、オートロック式の自動ドアを開けるためにポケットから鍵を取り出そうとした。

右手に買い物袋を持っていたので左手を使ったが、はめていた手袋が引つかかり地味に手間取っていたら、背後から足音が聞こえた。

ハア……。

ため息を付き、足音の主のほうに振り向いた。

「……いい加減諦めて帰ってくれないか？」

無論、相手はゼルダ。

強情と言うよりかは、命令をインプットされたロボットのような奴だな。

さつきから表情なんて一切変えていない。

完璧なポーカーフェイスだ。

黙っていれば綺麗、な女は結構見てきた気がするが、黙っていないければ綺麗、なんて女は記憶にはなかった。この女は恐らくそうだった類だろう。普段の日とかでも、殆どといっていいほど喋らないんだらうな。

「さきほど、時は金なりと言いましたね？」

そういうとゼルダは鞆に手を入れた。

また名刺でも出すのか、はたまた今度こそ『S & W M36』を取り出すのかと思ひ、俺は慌てて買い物袋を床に落とし、ポケットから左手も出した。手袋がはずれ、右手だけがはめているダサイ状態になったが生命には変えられない。

端から見ると本当に酷いよなこれ。もう癖にまでなってるからなかなか直せないだよ。

そんでまあ、出てきたのは「お札」みたいな長方形の紙。読み方は任せる。

続いて胸ポケットから万年筆を取り出し、サラサラとなにかをその紙に書きだした。

……ん？ おい！ まさかそれは！？

「これでお時間をとらせて下さい」

ゼルダが渡してきたその紙には、元からある印字とゼルダ自信がそこに加えた筆でこう書かれていた。

```
☐
ZELDA DAUGHTRY 04/04/20
XX
NAGABUCHI UCHU $ 1000.
00
```

ZELDA DAUGHTRY

☐

その紙の名前はパーソナルチェック（小切手）。

なんとなく思ったけど「パーソナリティ」と「パーソナルチェック」って言葉が似てるよな。

やっぱりパーソナルチェックは大事だよな。

「上がってくれ」

ポケットから鍵を取り出し、自動ドアを開け、自分の部屋へと向かう。買い物袋は忘れずに持っていったが左手袋を回収し忘れていた。いくらでも予備はあるから失くしても別にいいが。

にしても別に金が欲しいからあんな諺を持ちだしたわけじゃないんだけどな。

ゼルダさんバンザイ。

3 (後書き)

パーソナルチェックとは銀行の当座預金に基づいて個人が使用する小切手です。日本ではあまり見られません。海外では一般的に使われています。換金の有効期限は六ヶ月で、日本だと手数料が五千円ほどかかってしまい、入金されるのにもそれなりに時間がかかるので急な現金化は出来ません。

十萬ドルかと思ったけどやっぱり千ドルでした。

まあそれでも八万円くらいにはなるだろうからいいけどな。

さて。

ゼルダ・ドートリーにバンザイしたとしても、サルス学院にバンザイする気はさらさら無い。

理由は先のとおり。

俺にメリツトがない。

就職先が決まるじゃないかと思うかもしれないが……ところがどっこい、俺の就職先はもう決まっている。

中間あぐりという俺の数少ない友人が、祖父が経営している会社を引き継ぎ俺のことを誘ってくれているのだ。会社は小さいが医療関係のモノで、そこでは俺が大学で培ってきた知識や技術もそれなりに活かせるだろう。経営に関しても、既にあぐりが色々と考えているらしいので心配はしていない。確信はないが、あいつならなんでも適当にこなすだろう。

……なにせ中卒のくせに俺より頭が良いわけだしな。

部屋の鍵を開け、電気をつける。

ゼルダを家上げた。

よくよく考えたらこの部屋に俺を入れたのはこれで二人目だ。一人目は先ほど言った中間あぐり。二人目はこの女ゼルダ・ドートリー。

どちらも女だった。

大学で同じ学科の知り合いに斎藤柳緑という奴がいるが、こいつとはよく飲みに行ったりはするけど部屋に招いたことはない。多分、あいつは俺が寮に住んでいることも知らないんじゃないかとも思う。聞いてこないしな。

寮、と言っても食堂があるわけでも風呂やトイレが共同であるわ

けでもない。食堂を除けばそれらは全て各部屋に備わってるし、キッチンだって付いている。ただ単に、アパートの空き部屋を大学側が買取り、学生に安い値段で貸して、それを「寮」と言っているだけだ。

1kで、洋室6帖の小さな部屋。

そこが俺の住処だ。

部屋にある家具はベッドと丸テーブルと椅子が二つ。テーブルの上に置いてあったノートパソコンをベッドに放り、椅子を引いてそこにゼルダを座らせた。

「どうも」

相変わらずの変化しない顔でそう言った。

……この部屋を見たら何かしらの反応をすと思ったんだがな。

あぐりを初めて家に上げた時は、あまりの家具の無さに驚かれ、色々と言文を言われた。あの時に比べればテーブルに椅子が二つと合計三つも家具が増えてはいるのだが、その差のおかげでゼルダが驚かなかったわけじゃないだろう。多分この女はあぐりが初めてこの部屋を訪れた二年より前に来たとしても同じ反応をする気がする。俺はもう一つの椅子にはまだ座らず、キッチンに行ってコーヒーを用意した。インスタントやバリスタマシンのものじゃなくて、コーヒーメーカーを使った割と本格的なやつで。

客人を饗すためというよりかは俺が飲みたいだけなだけだな。

そうじゃなかったらコーヒー作るのにわざわざ五分も待たせないし。

自分の分だけ用意しようかとも思ったが、流石にやってることろがダサいと思ったので止めた。普通に二杯用意しよう。

「はいどうぞ。ミルク、砂糖はご自由に」

コーヒーの入ったカップと湯のみ、その他トレイに乗せ、テーブルに戻る。

客人用のマグカップを用意しているほどには俺の交友関係は発達していない。なので客が来たときはこうやって代用品を使っている。

椅子に座り、カップをゼルダの前に置き、俺は湯のみを掴んだ。

「……コーヒーがお好きなのですか？」

と、そこで以外な反応がゼルダから出た。

顔を見ると相変わらずの無表情だったが、今の声には気が立ったモノが含まれるように感じた。

「……関心してるのか？」

よく見ると、僅か、ほんの僅かだが左目が見開いている。

「まあ、好きか嫌いかって訊かれた好きって答えるかな」

「そうでしたか」

「あんたは？ もしかしてコーヒーとか苦手だった？」

「いえ、頂きます」

ゼルダは言い、カップを手に取った。一緒に用意した角砂糖には手を付けず、皿を置いたままカップだけを口に持って行く。

「……………」

様になっていた。

ゼルダが一旦口を離すまで、ついその動きを自分の目で追ってしまふ。

なんだ、こいつもコーヒーが好きなのか？

さっきは曖昧な答えで返した俺だったが、実を言うとコーヒーはかなりと言っていいほど好きだ。ただ別に味について語れるわけではなく、コーヒーを飲むという行為自体が気に入っていて、ほとんど煙草の代わりに口に入れているのだとあっていい。

「コーヒー好きなのか？」

ちよつとした期待を込めて思わず聞いてしまふ。

さっきゼルダが俺にしたのと同じ内容の質問になった。

「……そうですね、好きといえば好きですが……私の場合は生徒から影響を受けただけです。本当の意味で好きと言っているのかはわかりません」

「生徒？ サルス学院のか？」

特別支援学校にそんな生徒がいるのか？

「ええ、彼女はコーヒーが好きでして、よく私や他の先生方にも薦めてくれます」

「へー」

気が合いそうだ。

なんとなく湯のみに入ってるコーヒーを見つめる。座ってるテールブルは電気の真下にあるため、コーヒーには俺の顔が映っていた。

……とてもじゃないがコーヒーを趣味にするような男の顔とは思えないよな。

免許証とかの証明写真を取ると犯罪者みたいな顔になるだろ？

ああいった顔を標準搭載しているのが俺だ。

オールバックの頭は、ワックスを使った人工的なものではなく、俺が元から持つている硬い髪質がそうさせている。若干だが広いデコにニキビやシミといったものは特に見当たらないが、少しでも眉を動かすと思いつ切りシワがそこに現れ、大抵の奴らがそれを見るだけで何故か謝ってくる。目付きも悪い。三白眼とまでは言わないが、それでも虹彩の部分が入り小さい自覚がある。

俺は俺以外にコーヒーを趣味とする奴に会ったことはない。

少し気になったので聞いてみた。

「その子ってどんな子？」

「コーヒーが好きな子です」

「……あ、いや、そういう事じゃなくて、どういった性格の持ち主なのかとかさ」

「生徒を特定できる情報となりますのでお教えすることができません」

「……………」

でたよ。できましたよ。サルス学院が使う便利な言葉。生徒の

個人情報の保護。

次に来る言葉も大体予想できた。

「ですが、永淵様がサルス学院のスカウトを受けてくださるのであれば、直接お会いすることができると思います」

「いや、それはない」
ビシッとやってやる。

別に気になるとは言ってもサルス学院に行つてまで会いたくはねえよ。

そもそもなんでコーヒーの話題からサルス学院の話題に切り替わつてんだ。

千ドルのパーソナルチェックを貰ったとはいえ、俺は適当に話を有耶無耶にして帰ってもらつつもりだったんだけどな……。どうも上手くいかない。

この際さつさと要件聞いて早々に諦めてもらうかとも思ったが、まだそれは早い気がする。

なんとなく、ゼルダの眼帯に目が行つたのでその話題に持つていくことに。

「聞いちゃいけない事かもしれないけど聞いていいか？」

「はい」

「その眼帯って本物？ それともアクセサリー的な何か？」

なるべく失礼な奴を装つて俺は訊いた。こうすりゃ俺のマイナスイメージにも繋がり、諦めがつくかもと思ったからだ。就活でやると自殺行為以外の何物でもないなこれ。

……そもそもなんで学院が俺をスカウトしに来たのかが分からねえ。

医大生だとか研究内容だとかさういったところに幾つか思い当たる節があるにはあるが、それを訊いてしまつと多分そのまま相手のペースに持つていかれてしまいそうなので今は保留。

自分から地雷を踏みには行かないように、少なくとも、簡単には『サルス学院』の話題に転換されないような質問を俺はゼルダにぶつめた。

「この眼帯は『サルス学院』で開発しているものです」

……畜生。

「失つた視力を補うための機巧がこの眼帯には組み込まれておりま

して、現在試験中の品になっていまして私自身も……」

「あー、いいや。おっけ、わかった」

医大に身を置く人間としては、なんかめちゃくちゃ気になる内容だったが聞くのはよそう。サルス学院の話題であることに変わりはない。相手に俺のマイナスイメージを与えたとしても、俺自身が学院のプラスイメージを持ってしまったら籠絡の可能性も格段と上がっちゃう。

他になにか、本当に『サルス学院』へ繋がらない話題を探そうとしたが、

「一つよろしいですか？」

急にゼルダが口を開いた。

……しまった、話題を逸らし続けていたのがバレたか!?

千ドル貰って部屋まで上げてしまった以上、さすがに相手から話題を持ち上げられてそれを誤魔化そうとするのは醜い。

交流関係が絶望的な俺だが、それでもプライドと俺なりの自己ルールは持ち合わせているのだ。

その自己ルールの一つにあるのが「給料分の仕事はする」というもの。

今回に限っては「給料」と言うよりは「チップ」に近いものなのだが、だからといってそれを言い訳にすると俺のプライドがみみっちく思えてくる。

くそっ、しょうがない。腹を括るか。

俺は言った。

「……………砂糖ならトレイの上にあるけど」

普通に誤魔化す。

なんとも言う方がいい。

コレが俺だ。

「いえ、そうではなく」

無論、否定するゼルダ。

コーヒーはブラック派らしい。

「私が気になっているのはそちらのほうなのですが……」

ゼルダは何かを指さしそう言った。

「……ん？」

その先にあつたのは、俺の右手。

そこには未だ手袋がはまっていた。

「……あー。」

業務用品店で大量購入できる白い手袋。軍手とかではなく、ホテルマンや質屋、タクシーの運転手等が物を丁寧に扱うときのためにはめるような整理用の物。

そついや片っぽだけ外してたね俺。

左手はさつき放置してきたんだつたな。

「外さないのですか？」

そう尋ねてきた。

その顔には、相変わらずなんの嘲笑や軽蔑といったものはないポーカーフェイス。

単に疑問に思っただけなのか、間違えを気づかせてあげようという親切心か、それとも本題に入らせようとしないう俺への報復か、もしくは……。

「……」

沈黙したのは俺の方だった。

普段外出するときは常に両方の手にはめている手袋。こつすることとで特に不振がられず、むしろ清潔感のある男として見られることも多い。

だけど片腕だけにはめていけるとなるとそうはいかない。少なくとも清潔感のある男、と見られることはなくなり、むしろ何かを気取った厨二病野郎と勘違いされる。

どうしたものかと思つたが、もはや選択肢は限られる。

ここで「俺は潔癖症なんだ」と言つのもアリかと思つたが、そう

なると手袋をはめ直さなかった左手が明らかに嘘を付いているのでバレル。

だからって右手袋を外すという選択肢を執る気はない。しようもない俺のプライドが、それをさせることを拒んでいる。

「えーっと、ゼルダさん？」

「はい」

やむを得ない気持ちで、今度こそ本当にマジな気持ちで、俺は自分からゼルダの会話のテリトリーに入って行った。

「そろそろ仕事の話しよう」

4 (後書き)

潔癖症も『障害』の一つですね。

強迫性障害の一種とされ、人によつては永淵雨中のように手袋を常に身につけている人もいますが、逆にその手袋に細菌などが付くことを恐れて手袋をしない人もいます。

変わった例に、最初はお洒落で手袋をはめていた人が、だんだんと汚れを意識するようになり、そのまま潔癖症になったというものもあるそうです。

永淵雨中は潔癖症ではありませんが、外に出るときはいつも手袋をはめています。もしかしたら彼も、いずれは潔癖症になるかもしれません。

最浜医科大学。

それが俺が通っている大学だ。ちなみに私立大学。名のとおり医大であり、存在している学部も当然ながら医に関係があるものばかりになる。

代表的なものから言って『医学部』『歯学部』『薬学部』の三つをまず抑えておこう。

医大の顔とも言えるこれらの学部は、最浜医科大学ではなるべく人の目につきやすいよう都心にあるキャンパス内に三つとも収められている。キャンパス自体も、目立たせるためなのか地価の問題からなのかはさておき、「横に広く」よりも「縦に長く」設計され、ランドマークのような役割を担いながら形造られている。「最浜医科大学と言ったらこのキャンパスのことを指すんだ」とはさすがに明言しないものの、大学のホームページのトップ画面は常にこのキャンパスの写真がでっかく映っていたりもするので、言いたいのには明白だった。恐らく世間一般に最浜医科大学と言われたらこのキャンパスが真っ先に人の頭に浮かぶだろうし、このキャンパスに通っているのであれば「医大生」として我褒めもできるだろう。

次に『獣医学部』『看護学部』『健康科学部』について。

これら三つの学部もさつきとは別のキャンパスにまとまって置かれているのだが、このキャンパス自体は先に述べたような都心部には建てられていない。どちらかと言えばその「近郊」と呼べるようなところに建っている。「近郊」の人口密度は都心部のソレと比べれば小さく、別に縦に長くも造られていない。街のランドマークとして成り立つような「有名度」はそこには確かにないだろうが、それでもこのキャンパスには最浜の付属病院が設置されている。名前は「最浜医科大学付属病院」。そのまんまの名前だが、同街にある病院の中では一番に大きく、設備も一番にしっかりしている。受け

入れ拒否、なんていうのも今のところは無いようだ。大人の都合上、大学のトップページは滅多に飾れないとは言え、誇っていいほどには「医大」として成立しているし、そのキャンパスに通っていい限りは自慢できる程度に「医大生」でいられるはずだ。

最後に『理工学部』『経済学部』『心理学部』について。

疑問に思うかもしれないが、その反応は間違いじゃない。最浜医科大学にはキャンパスが計三つあり、説明してない残り一つのキャンパスにこれらのような、どうして医大に存在しているのかが分からない学部が突っ込まれているのだ。一応、それらの学部から派生している学科名を聞けば少しは医大にある理由が分かってくれるかもしれないが、やはり偏差値自体が他のキャンパスの連中に比べてアレな以上、強弁にも成りかねないので言うのは留めておく。キャンパスのある場所は、都心部でもなければその近郊でもなく、ほとんど「田舎」と言っている場所に設置されている。属している県自体は他の二つと同じなのだが、土地の値段に十倍近い差があるような場所なので、とても同等であるとは言いがたい。そうした環境や比較といったものからぶっちゃけた話、とてもじゃないが「俺って医大生だぜ！」と胸を張れるようなキャンパスではないのだ。

他のキャンパスの連中からは「最浜医科大学の底辺」だとか「医大生としての肩書きが欲しいだけの集団」とか言われているらしいが、あながち間違っていないので特に否定する気もない。どの学部でも勉強している内容は「医」というものに通じてはいるが、やはり入学してくる連中は、俺を含め、そういった精神の持ち主ばかりだ。

……そしてまあ、いい加減感づいているとは思うが、この俺永渕雨中はこの最浜医科大学最底辺キャンパスにある『理工学部』に属している身だ。他のキャンパスの学生共から送られているであろう冷やかな電波と、同じ学科の同級生共の嘘くさい物を見るような視線を背中に浴びながら、三年以上に渡る長い月日をその学舎で過ごしてきた。

……あと最後になんか付け加えて言っておくこととしたら何だろう？

私立大学って裏口入学しても罪にはならないってことぐらいかね？

とまあ、俺がいる大学のキャンパスというのはそういうところなのだが、改めて思い返してみると、ますますどうしてサルス学院が俺のことをスカウトしに来たのかが分からなかった。

特別支援学校なりに医の道に通じている奴が欲しいのだろうが、それなら俺なんかよりも『看護学部』があるようなそっち系のキャンパスの人間のほうが適材だろう。

「とりあえず、どうして俺をスカウトしてきたのかが知りたいんだけど」

コーヒーをもう一杯入れなおし、ついでに手袋を左手にはめなおしてから、俺はゼルダに訊いてみた。どうもゼルダはサルス学院についての簡単な説明から始めようとしていたみたいだが、学院についての概要は大学で習っていたし、別段聞きたくもなかったのでザツクリと割愛してもらった。時間も十八時半を過ぎ、若干腹も減ってきているしな。

ゼルダは「はい」と小さく返事をした後、続けて話した。

「私たちサルス学院は、永渕様が通ってらっしゃる『最浜医科大学』と一つの提携を結んでいまして、毎年、卒業生の何名かを学院のほうで雇うことになっていいます」

どうして俺が最浜医科大学に通っていることを知っているのかを聞くのは野暮なんだろうな。今の時代、自分のプライバシーなんてものは守りきれぬ筈がない。俺もさっきの手袋のことでツッコまれたくないのだから黙っておくことにする。

「昨年度は最浜医科大学の学生を三名、サルス学院のほうに就いていただくことになりましたが、その内の二人に少々問題が起きまして」

「問題？」

「はい。就任した方々の名前は申し上げられませんが、現在では既に両方とも解雇の身となっておりまして、サルス学院を去つています」

問題と解雇という単語が一緒に出てきている以上、そこに隠れている事象はすぐに思いついた。

「不祥事でも起こしたか」

「はい」

あっさりとゼルダは認めた。

サルス学院は『国際的な特別支援学校』や『医療機関との二面性』という特色とともに、さらにもう一つ特徴的な体制を敷いている。

それは異常とまで言われる機密主義だ。

サルス学院は約三十の『支部』を世界中に建てていられると言われるが、それについての正確な数や点在している国や場所についての詳細は一切として公表をしていない。

学院に籍を置く生徒の個人情報保護というものを名目に挙げているが、本当にそうであったとしても、学院の敷地内に米国の治外法権を敷いているという事実を知ってしまえば、誰であっても度を越していると感じるのが普通だ。

治外法権が故に、サルス学院にどんな生徒がいてどんな研究をしているかの情報は、それを知ろうとするだけで外交に引っかかる可能性があるので、ほとんどの場合は漏れることがない。

大学の講義では学院について結構教えられ気がしたが、今思い返してみればそれはサルス学院と最浜との間に、ゼルダが言ったような雇用に関する協力関係があったからなのだろう。

そして、その最浜医科大学の元学生が引き起こしたサルス学院に関する不祥事があるとしたら、それは間違いなく……

「不祥事ってのは情報漏洩の類か」

「……………」

コレに対してゼルダは沈黙で返した。

否定をしないってことは、学院の人事部長という立場上、肯定ができないんだろうな。多分当たりだ。

「おっけ、訊かない」ここは貸しを作っておくことにする。「で、その話がどうして俺をスカウトするって理由に繋がるんだ？」

結局の話、俺が訊きたいのはそこだ。

スカウトって言葉の以上、俺が寝ぼけてサルス学院への就職志望届けを出したわけじゃないだろう。あくまで学院側が俺を誘いに来たのだ。

ゼルダは少し考えるように目を細めてた。どこまで言っているのかを考えている感じだ。

「……不祥事を起こした二人の内の一人居ますが、その人は永渕様と同じ『理工学部医療工学科』の出身の方でした」

「はい？」

理工学部医療工学科。

それは確かに、俺が通ってる大学の俺が属している学科に違いない。

医療に関係のある機械や器具などを、そういったものを主に学んでいく学科だ。

「えっ？ 何？ 医療工学科の連中でサルス学院に就職した奴がいんの？」

「今となつては過去のことですが」

「不適材不適所だろ。俺ら医療工学科は医療より工学に重きを置く学科だぞ」

俺たち医療工学科の人間は、病気や怪我を治すという意味での「医者」には間違つてもなることはない。あくまで俺らは医療の人間ではなく工学の人間だ。特別支援学校に雇われて障害者に対応できるようにな器量は持ち合わせているとも思えない。

馬鹿じゃねーのと吐きそうになつたけど流石に自重した。

どうせ俺のが馬鹿だし。

「あ、それともその医療工学科の奴は研究職だったのか？」

サルス学院には医療機関の二面性を持っている。だから「サルス学院」という言葉は特別支援学校を表すのではなく、医療機関の方を指している場合もある。そう思ったのだが……

「いえ、最浜医科大学の推薦枠からではサルス学院の教職にしか就けません」

……だそうだ。

やっぱり不適材不適所じゃん。

「サルス学院は不祥事を二人を解雇処分としましたが、その結果二人分の教師が掛けてしまいました」

「代わりの教師はいないのかよ」

「いないのです。生徒の身を守るという義務が我々にある以上は、簡単に外部の人間を学院に入れることは出来ませんし、個人情報漏洩などの不祥事が起きてしまわないよう、教員の数は最低限にしています」

アメリカの治外法権を持っているサルス学院からして、「外部」というのは日本人のことか。塾教師のアルバイトを募集するようなノリで人を雇うことは流石にできないだろう。

不祥事の例に「個人情報漏洩」を持つてきたのも、十中八九それ起きたことを示していると見ていい。恐らく無意識の内に行ったのではなく意識した上で口にしたな。俺のさっきの質問に答える意味でもあったんだろうけど。

「サルス学院は……というよりわたしはですが、空いた二人の席を埋めるために一度、最浜医科大学に行き相談にのってもらいました」
「なんでそこで最浜に行くんだよ!? 不祥事起こされたんだから見限れよ!!!」

「……か不祥事起きた側が起きた側の古巣に行くってのもほとんど脅しに近いよな。そりゃ文句をいう権利はあるかもしれないけどな。」

「そこで永渕様を紹介されました」

「……………」

ああ、クソッ。

……………そういうことか。

サルス学院、特別支援学校、障害者の子供たち。

最浜医科大学、企業推薦枠、元医療工学科の馬鹿による不祥事。

目の前に座る眼帯をした女、クロエラ・ドートリー。

そしてこの俺、永湊雨中。

これらが繋がった理由が分かった。

自然と右手で頭を掻きむしる。

苦虫を噛み潰したような顔、この時の俺はそんな顔をしていたんだらう。

「……………紹介した奴は誰だ」

俺は問い質す。

「お教えできません」

「何でだ!!」

テーブルを叩いて抗議の体を示す。

湯のみとカップに入ったコーヒーの中身が少しばかりテーブルに飛び出た。

「サルス学院とは何の関係もないだらうがよ、そいつは!」

「情報提供者の身元は明かさないといい条件の元で紹介されましたので」

「知ったことか!」

自分のプライバシーなんて守りきれぬ筈がないと先ほど俺は思ったばかりだが、だからってそのことに対して怒りを感じないわけじゃない。自分にとって害のない情報が漏れる分には特に気にはしないが、この「紹介」というものに関しては何らかの俺を害している。

「言え! 眼帯女が!」

「言えません」

「ふざけんじゃねえ! こっちは完全に侮辱されてんだ!!」

椅子から立ち上がり、咄嗟に直面しているゼルダの首向かって右腕を伸ばした。

ゼルダは反応をしないのか出来ないのか分からないが、そのまま身動き一つせず座っている。

一秒も掛からず首に手が届くこの距離で、俺は怒りに任せて行動を実行に移そうとした。

移そうとしたが、

「……………ッ」

寸前で思いとどまり、首に触れる直前で止めた。ゼルダの銀色の髪こそ右腕に垂れていたが、結果的にはそれ以外の接触の箇所は無い。

何をしようとしていたのかは言うまでもなかった。

俺はゼルダの首を絞めてでも、俺のことを紹介した奴を吐かせようとしたのだ。

(……………落ち着け……………落ち着け……………)

右手を引き、開いた拳を閉じる。

椅子に着き、左手で右手を押さえつけるような形で手を膝においた。

「……………すまん」

素直に謝った。

「……………いいえ」

この時俺はゼルダの目を見ず僅かに下を向いていたので、ゼルダがどういふ顔をしていたのかは知らない。ただ、間こそあったものの、口調自体は変わっていなかった。そこで今まで気にしていないものと勝手に判断した。

「……………」

「……………」

妙な沈黙が空間を支配した。

ゼルダは見た限りそこまで話すような奴とは思えないし、俺にしたらって普段は口数が多いほうじゃない。

無駄に防音が整ったこの部屋は、さっきの騒ぎで隣人に通報されることはないだろうが、それでも今の俺には有り難いものとは言えない。今はむしろ外部の音が欲しいくらいだ。

時刻は一九時を少し周り……、

沈黙を破ったのは俺の腹の虫だった。

5 (後書き)

国立の大学にお金を使って裏口入学をすると収賄罪や贈賄罪などのなんらかの罪に問われますが、私立の大学に同様の手で裏口入学する場合にはそれらの罪に問われることはありません。

私は法学部の人間ではありませんので詳しい理由は分かりませんが、この違いは公務員か非公務員かの違いにあるそうです。

寮から歩いて十分ほどしたところに、この町に数少ないファミリ
ーレストランが存在する。

入り口を入れてまず目にするのが壁際に並んである五つの椅子。
その近くには名前を書くための紙と、このファミレスとはなんら関
係性も見当たらない玩具グッズがいい値段で売っていた。

椅子には誰も座っていないかったが店内が丁度満席だったため、俺
とゼルダは席が空くまでその椅子に座って待つことに。

寮から此処までの道のりで、会話という会話は一切と言っていい
ほどしていない。適当な相槌と、沈黙を誤魔化するための俺の独り言
くらいだ。

ここに来たのは無論、晩飯を食うため。結局三日続けて栄養バラ
ンスが良いか悪いか分からないものを食べることになったがこの際
しょうがなく思う。晩飯とするはずだったナポリタンとピーマンの
肉詰めは材料は冷蔵庫に放り込んでおいた。

このファミレスには、ほとんど騒音目当てで来たと言っていい。
とにかくあの空間の沈黙には耐え切れなかったのだ。

店内に響く、子供連れや高校生連中による会話の騒がしさがなん
となく俺を落ち着かせてくれた。

だが、それは俺だけの感想。

俺の左隣に綺麗に背筋を伸ばして座っている、このゼルダという
女はどんな気分なのだろうか。

「……………」
横目にゼルダの顔を見る。

銀色の髪よりも、黒のビジネススーツよりも真っ先に目に映った
のは眼帯。

眼帯女が！

部屋で俺が口にした言葉が頭を過ぎった。

侮辱で言つたつもりは無いが捉え方は相手次第で変わる。俺は他人のことを気にかけるような精神を持ち合わせてはいないが、だからって自分の咎を度外視したりはしない。

ましてやその後、俺はゼルダの首を絞めようとまでした。

結果的に実行に移さなかったとはいえ、やろうとしたことはクズに変わらない。

(……………馬鹿か俺は)

あれは怒る対象が違う。怒りに任せて眼の前の人物を殴るというのは、知の無いガキがやること。今、そういつたガキと大差のないクズな俺は……………あまりにも醜すぎる。

呆れてため息が出そうになったが、それを隣に座っている奴に聞かれたくなかつたので耐えた。

猫背で座っていた背中がうらぶれ、何年も前にやめたタバコが今になって無性に吸いたくなってきた。

……………そういえばなんでやめたんだっけ？

……………ああ、値上がりしたからか。

そんなことを頭の中でふわふわと思いついていた。

そういえばだが、ファミレスの入り口には玩具売り場の他にももう一つ、ガラス扉を挟んだ先にタバコの自販機が設置されてあつて、そこ自体が小さい喫煙所になっている。ついでにライターもレジの横に、こちらはちゃんとファミレスのロゴが入った商品として売られてあつた。

……………どうすつかな？

店内を見回してもまだ少し席が空く気配はない。

隣のゼルダも、未だ姿勢を崩さずただ座っている。

……………まあいいや、吸お。

椅子から立ち上がり、ガラス扉を開け自販機の前へ。小銭を入れて、適当に目に入った銘柄のボタンを押し、下口から取り出した。

封を開け、一本を口に加え、ライターを扱う為に再びガラス扉の外側へと出る。

と、そこで、

「……………どうぞ」

いつの間にか俺の近くにいたゼルダが、何かを持って待っていた。

「……………」

ポカーンと、豆鉄砲でも食らったかのような俺。

ゼルダが持っているのは紛れも無くジッポー。

一目見てそうであることは理解したが、その行動に意表を突かれたのは確かで、思わず口に咥えていたタバコを落としそうになった。ジッポーは店に商品として置いてあるものじゃなく、恐らくはゼルダ自身が個人で持っていたもの。そのフレームには、なんの皮肉かは知らないが十字架が彫られてあった。

「……………くくっ」

落ちそうになったタバコを歯で押さながら、俺は思わず苦笑する。そして素直にジッポーをゼルダの手から受け取り、もう一度喫煙所に入ってタバコに火を点けた。

「ありがとさん」

タバコの煙が漏れないように設計されたその個室の中から、果たして聞こえるかどうかは分からないが言っておいた。

徐々に吸ったタバコは、まあ特に美味くは無かったが、それでも寿命を削るだけの価値はあったと思う。ここに来てやっと頭が落ち着いた気がした。

口の中の苦虫が多少は出ていったのかもしれない。

6 (後書き)

日本では「喫煙は、あなたにとって肺がんの原因の一つとなります。」などの表記がタバコにされています。相対的な害を考えると、実はタバコは麻薬よりも及ぼす害は大きいです。

……年々たばこ税の増税が話題になっていますがそろそろ勘弁して下さい。

とまあ、沈黙による重く苦しい空気は若干被えはしたが、何度も言いますがパーソナルチェック貰おうが火を貰おうがサルス学院のスカウトには一切応じる気はありませんよマジで。

やっぱり面倒くさそうですもん、はい。

「二名様でお待ちのナガブ子様、二名様でお待ちの……お……」

タバコを吸い終わり椅子に座り直すと、少し待って女性店員が俺たちを呼んだ。俺とゼルダの奇妙な組み合わせにビビったのが、後半が俺たちと目が合うや少しばかりトーンダウン。

怪しさ満点の黒装束の銀髪女性（眼帯装備）と、厳つさ満点のオールバック野郎（手袋装備）の組み合わせにはいささか驚いたのだろう。俺たちの入れ違いで出ていった家族連れの客も、なんか目を合わせないよう必死だった気がする。

店内は全テーブルが禁煙席となっており、店の中で唯一タバコが吸える所は先ほどのガラスで仕切られた喫煙所だけだった。

店員に誘導され、俺とゼルダは席に着く。俺は和定食を、ゼルダはペペロンチーノを注文してメニューが運ばれるまで待つことに。

ゼルダの注文したものが、俺が本来晩飯として作るうとしていたものに似ているのは気のせいだろうか……？

「今一度、お頼みます」

「あん？」

突然とゼルダは喋りだした。

……いや、言いたいことは分かってる。

間違いないサルス学院の話だ。

俺の暴走行為で有耶無耶になったかに思えたが、ゼルダにとってこれは仕事。このビジネススーツに身を包み事務的な口調まで板についた女が、そう簡単に退くとはもはや到底思えない。

徹底抗戦の構えを見せる必要がある。無論、暴力じゃなくて交渉の意味で。

この際、俺を紹介した輩について聞き出すのは諦めよう。今でも十分に腹が立つが止む終えまい。こうしてゼルダ自体が既に俺の存在を捉えた以上、いま回避すべき障害はこちらだ。

「サルス学院のスカウトを受けて下さらないでしょうか？」
「断る」

サルス学院は例外として、普通俺のような奴を雇用したがる企業はまずいない。最浜医科大学の底辺が集うキャンパスは一般の人たちにはさほど著名ではないが、企業等には悪い方の意味で名が通っている。理系の俺らでも、文系並に就活で困難すると言われるくらいだ。

……なんで入学決めたんだろ俺？

まあ、それはいいや。

とにかくこの女さえ諦めさせれば、今後俺に言い寄ってくる人間は当分として出てこないはずだ。

そうと分かれば徹底抗戦。

さすがにもう逃げるのは止めだ。

「第一に、面倒臭い」

壁を築きあげるように、俺は本音を告げた。

教師なんてものはやりたくない。

面白そうだななんて微塵も感じないし、それ自体になんらやり甲斐も見い出せん。

ましてや特別支援学校。

相手は障害者の子供たちだ。

子供ってだけで俺には十分無理臭いの、それに『障害者』まで加わったら手に負える気がしない。

「第二に、俺の就職先は決まっている」

二つ目の壁 仲間あぐり。

あいつが以前持ちだした起業の計画に、俺は恐らく乗ると思う。今のところ俺が選べる選択肢の中では、それが一番まともだ。

先のとおり、俺ら最浜の理工学部連中の就職活動は厳しい。それを打開する手段でもある。

「第三に、俺はまだ学生でいたい」

三つ目 ゼルダが寮で俺に話した内容を思い出してくれ。

1・二人ほど教員が欠けた。

2・その穴を埋める必要がある。

3・代わりの教員はいない。

言葉にこそしていないが事態は明らかに緊急を要している。これは俺ら学生が完全に社会人になる来年の話をしているわけじゃない。もっと早期の話をしている。つまりサルス学院のスカウトを受けるということは、同時に学生であることを放棄する必要があると見ていい。

これは流石に見逃せない。たとえ裏口から大学に入った俺でも、卒業ばかりは表口から出たい。それに大学の卒業と同時に貰える医療資格というのも幾つかは存在する以上、それを見過ごす手はないだろう。これまでの三年間がとことん無駄になる。

「第四に、俺に教師は無理だ」

どこの馬鹿かは知らないが、ゼルダに俺を紹介した奴が、どうして俺を選んだかの理由については察しがついている。もし本当にこの理由で当たっているのならば、それを俺に対する侮辱だ。本当は今でも誅伐として顔の形が変わるまでは殴ってやりたいと思ってる。だが……、

「第五に、俺は……」

今は何より、馬鹿の名前以上に知りたいと思うことが別にあった。対面するゼルダ・ドートリー。

……この女は、その馬鹿が何を理由に俺を紹介したのか知っているのか？

「この四つだ。この四つを理由に、俺はサルス学院の要請を拒否させてもらう」

右手の指を四本立て、それをゼルダに見せつける。

五つ目は結局思いつかず、四つ目はなんだか一つ目と被っている気がしたけどまあいいか。

とにかくこれらは“防壁”だ。

建材は主に俺の我儘と基本的人権。

「言っていることが最低かもしれないがな、被スカウト側の俺にはこれらを十分に言える立場にある筈だ。幻滅されようが知った事じゃない。それが理由で俺のスカウトを取り消すならそれはそちらの勝手。逆にそういった俺の性格をそちらが考慮したとしても、この四つの条件に何も出来ないようなら、流石に俺のことは諦めてもらうぞ」

一気に言っちゃった。今までのゼルダとの会話の中では一番に長い暴言を。

紛れも無く俺の本音だ。

棘あつて、毒があつて、鋭くて長い。

そんなイメージを持たせながら俺は吐いてやった。

この防壁を打ち破れるもんなら打ち破ってみやがれ、と加えて言おうとしたところで……

「……………ではその四つの条件を満たせば、サルス学院のスカウトを受けたださるのですね？」

と、ゼルダは言ってきた。

……………え？ なにその反応？

顔は相変わらずのポーカーフェイスだけどさ、待ってましたと言わんばかりの台詞じゃん……………。

予想外の反応だったせいか、ついつつかり「……お、おう」と口にしてしまった。

なに肯定してんの俺!?

「第四の条件の解決案から提示させて頂きます」

訂正しようとしたその前に、ゼルダは喋りだした。

「つーかよりもよって一番弱い防壁を攻めるのかお前は。なんて奴だ。」

「教員免許の件で言っているのであれば問題はありません。こちらからのスカウトの場合、そちらは免除させて頂きます」

「うっ!？」

「永淵様の学力にしましては既に調査済みです。受験時の点数には若干の不審な点が見られましたが、入学後の成績を見るかぎりには十分にサルス学院の生徒に教えられるレベルだと判断しています」

「おい!？」

教員免許の件に関しては治外法権の都合からなんとなく予想していたが「………なんか色々とバレるとマズいことまでバレてるじゃねーかと思う。」

私立大学だから法律上の問題はないんだけどさ、やっぱりバレるのはよろしく無いんだよな。

最浜に迷惑がかかること事態は俺が気にすることではないけど、世間に知れたら最悪の場合は俺の学歴全てが抹消されるってのもありえる。

「第三の条件ですが、これにつきましても既に最浜医科大学に話を通しています」

「……………は?」

「サルス学院のスカウトを受けて下さった場合に限り、永淵様の卒業に必要な単位は全て修得したものの見なされる筈です」

「……………それってつまりアレだよな? ……大学行かなくてもサルス学院行ってさえいれば、卒業できるってことでもいいんだよな?」

「はい」

「……………」
単位が貰える……すなわち卒業ができる。
要するに学生でいられる。

そんな事が出来るのか一瞬考えたが、サルス学院には不祥事の件があつたのを思い出した。

確かにそれを交渉材料に最浜を脅せば、なんでも言うことを聞かせるくらいは出来るだろう。ましてや成績の操作なんてのは大した金も労力も使わなくて済む。書類を弄るだけで不祥事の賠償金やら何やらを帳消しにしてくれるなら安いもんだらう。

「第二の条件も問題はありません」

「……………え？」

問題ない？

二番目の壁はかなり潰されない自身があつたんだが……。

俺の就職予定先は誰にも話した記憶は無いし、志望の旨を大学に報告をした覚えもない。

もし仮に、例えば電話等の盗聴でそれを知ったとしても、中間あぐりは最浜とは関係の無い人間だからさっきのような交渉材料を使って脅すことは出来ないはずだ。

「……………!!」

いや、待て。

必ずしも交渉材料が最浜と関係のあるものとは限らないだろ。脅しの材料なんてものは個人個人で変わるし、何も材料が無くたって人を脅すことは出来る。

だが、もしも何らかの形であぐりを脅したのだとしたら、それはゼルダやサルス学院にとっては問題はないかもしれないが俺にとっては全くもって“問題なく”はない。むしろ大問題だ。

仮にそれをしていた場合、今度ばかりは本当に首は絞め切らせてもらう。

声にドスを効かせ、俺はその真意を問う。

「……………てめえ、それはどういう意味だ」

だがゼルダから出たのは、全くの見当違いの答えだった。

「永瀧様には、今年度だけ、サルス学院で教師をやってくださいればいいのです」

「……………は？」

その言葉の意味に眉をひそめ、力が抜けた右手がテーブルをゴンと叩いてしまふ。その音で周りに座っていた客に注目されてしまふが、ゼルダは気にせず言葉を続けた。

「サルス学院が永瀧様を雇う期間については話していませんでしたね」

「えっ？ あっ、ああ……………」

「わたしは来月五月一日から来年二月の終わりまでの期間を、永瀧様に学院の教師として勤めてもらうよう提案させていただくつもりでした」

「なっ！？」

何だと！？

「この条件であれば、永瀧様の就職先の企業様に一切の迷惑をかけずに済むと思ひまして……………それにご希望でしたら、その後の期間も続けてサルス学院に勤めていただくことも可能です」

「……………」

大口を開けて、馬鹿みたいな顔をする俺。

……………いや、でもよく考えたらそれが普通なのかもしれない。

サルス学院が欲しいのは空いた穴を埋めるための人材……………臨時の教師だ。

外部の人間を簡単に入れることはできないから、関係者として提携を結んでおり、且つ融通が効く最浜に人材を求めて来たと考えるのなら不思議ではない。最浜医科大学の……………ましてやあのキャンパスに所属している奴らなら、いざとなったら簡単に切れるし補給も可能だ。……………自分で言っていて悲しくなるねコレ。

でも、たしかにこの条件なら就職先が決まっていたとしても関係はなく、たとえ決まっていなかったとしてもサルス学院で働くという選択肢も与えてくれている。

なんでそういうことは先に言わないんだよ……とも思ったが、寮でサルス学院の話題を避けていたのは疑いもなく俺の方だ。

あれ？

そう考えると、なんか待遇良くな？

「……！！！！？」

いや、待て！ 揺れるな俺！

まだサルス学院で教師をやるメリットはそこまで大きくはな……
……、いや十分に大きい、最大の防壁として真っ先に築きあげた
第一の条件が残っている。

面倒臭い。

そう、コレだ。コレは崩せまい。

メリットを大量に積まれたところでデメリットが消えるわけじゃない。まして面倒という個人の感情は、その面倒と思わせる対象が除外されない限りは解消されない。

サルス学院が特別支援学校である以上、障害者の子供たちを除外することが出来るかって訊かれればそれは無理ってもんだ。

勝った！！

心からそう思った。そして

「第一の条件の解決案を出させて頂きます」

それと同時に死亡フラグは立った。

ゼルダが鞆から何かを取り出す。

それは俺が大嫌いな『S & W M36』でもなければ、俺が大好きなパーソナルチェックでもない。

ゼルダが取り出したのは一つの茶封筒。さらにその中から一枚の紙を取り出し、俺が見える向きにテーブルの上に置いていた。

書かれていたのは数字が羅列する表。
やけに「0」が目立つ。

そして俺は、一種の本能、野生的な勘から、それが何かを直感で理解した。

「……サルス学院の、俸給表!？」

思わず席から立ち、衝撃で固定してあったテーブルやソファーが僅かに悲鳴をあげる。

俸給表って言葉は間違いだが、初任給の欄に書かれてあった金額が日本の国会議員のそれと大差なかったため、思わず使ってしまった。

すなわちそれはサルス学院の給料表。

ああ、なるほど。メリットでメリットを消すことは出来ないが、個人の感情を変えることは出来るわな。それこそ千ドルの小切手で見知らぬ女を部屋に上げるような男なんて特に……。

昔、誰かが言っていた言葉を思い出す。

命はお金で買えないけど、世の中にはお金で買える物の方がいっぱいあるってこと、忘れないで。

……………なんのゲームだっけこれ？

7 (後書き)

永渕雨中はゲームのワイルドアームズが好きです。

結果的にボロボロにされました。

あんだけ大口叩いておいてそりや無いよな。

後半は死亡フラグを立てまくってた自覚もなんとなくあるんだけど……。

「……………」
さすがに俺も愕然とするしかなかった。

我儘をふんだんに詰め込んだ防壁はゼルダの「解決案」という名の砲弾により早々にぶち壊され、まるで焼け野原の上に立たされたかのような絶望感と、金を取るか、それともキャンパスライフを取るかの葛藤のみを俺の心には残す。

……………なんか大金積まれて、誰かを殺せって依頼された気分だな。

この場合、殺すのは人じゃなくて俺のプライドなんだろうけどね。

「……………」
……………腑甲斐ねえな俺。

ゼルダが言うとおり、確かに俺の出した条件は全て解決された。

その対応は完璧だったとも言っている。

サルス学院に言っても「学生」としての身分は保証されるし、来年にはあぐりの起業計画にも普通に参加することが出来る。俺には別に、大学で勉強を続けたいから「まだ学生でいたい」と言っただけじゃない。勉強をすることに意味があるんだ、などという熱血思考は微塵として俺の中には存在しないし、ぶっちゃけ卒業時に貰える資格さえ手に入ればそれでいい。

障害者の子供を相手にする面倒臭さだっ……そりゃあ確かに面倒臭いが、流石にこんだけ金を積まれれば俺だっ……気が紛れる。

普通のサラリーマンには見当もつかないほどの月給。

間違えて年休の欄を見ているわけでもなければ、金額の単位がジンバブエドルになってるわけでもない。

「……………」
それでもやはり疑ってしまう。
この額ってマジなのか？

テーブルの上に置かれてある紙を指さし、俺は念のためゼルダに聞いてみた。

「……………これって単位は円でいいんだよな？」

「はい。間違っていないです」

「数字が三桁おきに書かれてある点は“カンマ”でいいんだよな？
実は小数点でしたってオチじゃないよな？」

「はい、カンマです」

「……………」

……………マジだそうだし。

……………マジでどうしよう？

頭の中が混乱してきた。

眼の前にあるのは莫大な金を儲けるチャンス。

本来なら迷う要素なんて何一つ無いんだけどさ……………

いつもの俺なら迷わず金を選択してんだけどさ……………

俺は歯を噛みして、テーブル両肘をつき、両手を組んでデコを置いた。そうして出てくるのは当たり前前の思考。「これをしてくれたら大金を上げるよ」とか見知らぬ奴に言われた時に、誰であれ真っ先に抱く疑念……………、

……………すっげー嫌な予感がする。

「ううああ……………」

思わず声にならない声まで出てきた。

眼の前に提示してある給料表だけを見てみると、どうして今も俺が首を縦に振らないのか疑問にすら思えてくる。

たとえ罫のように見えても、餌として置かれている金額はあまりに魅力的で、壮麗で、八面玲瓏として俺の心を動かす。

部屋のどこかに飾っておきたくなるような金額のリスト。
その初任給や月給の欄に書かれている数字が、俺を捉えて話さない。

……本当に金が好きだね俺って。

自分でも驚いてるよ。

「あああああ………」

あっ、そろそろヤバイ。

とうとう意識してないのに言葉が漏れてきた。

俺が今迷っているのは、このスカウトを僥倖と取るべきなのか否かということ。

僥倖と取れば、あのつまらないキャンパスライフからおさらばすることができ、足りていない単位が悩まず呪縛も解け、講義や研究といった下らない時間の浪費も無くせる。

奇禍と取れば、目の前に提示されてある金が入ることはないが、疑心暗鬼と化して申し掛かってくるゼルダの誘惑から解放される。

今のところ、俺のゼルダに対する第一印象は変わっていない。

つかむしる時間と共にそれは強調されている気がする。

眼の前に座っているこの銀髪眼帯外人黒服女は、本来なら全力で関わるのを避けるような対象だ。どこからどう見ても怪しいし、誰が見ても不審を抱く。

せめて服装か眼帯をどっちか白にしてくれ。

言ったかもしれないけど黒って「地獄」を意味するからあまり縁起は良くないんだよ。

……なんか関係ないこと考えてないか俺？

「ううううあああああ………」

落ち着け俺。

怪しい女が出した怪しい金額が貰える怪しいスカウト。

果たしてこれは本当に罠なのか？

だがそれが杞憂だったらどうする？

そしたら俺は易々と人生の好機を逃したことになるんだぞ？
そもそも俺に罠を張る理由なんてあんのか？

金は無いよりある方がいいに決まってる。

命は金じゃ買えねえけど、人生ってのは金で変えることができる。
「買う」と「変える」って漢字の部分の読み方一緒だな。

平仮名で表記しちまえば区別が付かなくなりそうだな。

日本語って難しい……

……

……

……。

そして大体十五分くらいが経ったところ……

「……………」

「……………」 永渕様

「……………」

「……………」 永渕様

「はっ!？」

ゼルダの呼びかけに気付き、俺は目を覚ました。

まあ別に寝てたって訳じゃないが、意識だけどこかに旅立っていた気がする。

そしてなんか後半部分は金とは別のことを考えていた気がする。

辺りを見回すまでもなく、俺はまだファミレスにいた。なんかゼルダに呼びかけられなかったら、そのままどっかに行っていたんじゃないかと冗談抜きに思う。

テーブルにはお絞りが置いてあったので、それで顔を拭きとりあえず頭を落ち着かせた。

「……………」 っつて、あれ？」

そして気づく。

テーブルの上にあったのはお絞りだけではないことに。

そこには、俺が注文した和定食も、ゼルダが注文したペペロンチーノの皿もとつくに運ばれていた。春野菜を中心とした、なるべく健康によさそうなメニュー。栄養価の分からない料理を三日連続で摂ることを避けるために俺が頼んだ料理だった。

これらが来てからどれくらい経っていたのかは不明だが、目の前に座るゼルダは既にペペロンチーノを完食した後であった。使ったと思われるフォークが皿の上に丁寧に置かれ状態だ。

……つか起こせよ。

寝てないけどさ。

「いかなさいましたか？」

ゼルダが僅かに首を傾げながらそう尋ねてきた。

同席の男がアホみたいな奇声を漏らしていた正面で食事ができる精神は謎だったが、一応は心配はしてくれたいらしい。

「……あ、いや……何でもない……」

とりあえず平然を装い、俺も和定食を食べるために割り箸を掴む。「いただきます」と言いながら、割り箸を持つ両手に力を込めると

……

バキッ！ という音が鳴り、左側が半分ほどの長さのところで折れた。

「……………」

食う気が失せた。

よく見たら味噌汁も米も冷めてるし。

もういいや水でも飲もうと思いきやコップに手を伸ばすが……

「……………」

中身は空だった。

多分、無意識の内に飲んでいたんだろうな。人間緊張が高まると水分を欲するらしいし。

なんかもう泣きたいよ俺……。

「ゼルダさんよ……………」

視線を下にして、俺はゼルダに言った。

「……………返答まで時間くれませんか？」

情けない言葉だったが、今はこれしか言えなかった。

四月が始まってからまだ日はそんなに経っていない。ゼルダは来月の一日から雇いたいと言っていたから、それは四週間近く先のことになる。

少しは考える時間をくれるかもしれない　　そう思った。

それに賭けよう。

逆にここで時間を貰えないなら、サルス学院のスカウトは今ここで断ることにする。

ここまで頭の中がこんがらがっていると、俺はどうせまともな返事をしない。今の俺に一番欲しいのは考える時間だ。二、三日でもあれば、ゼルダが提示してきた条件が本当かどうかの裏も取れるし、あぐりや斎藤の奴ともこれについて相談することができる。

俺はゼルダの返事を持った。

すると、

「わかりました」

「！」

俺は顔を上げ、目の前のポーカーフェイスを見る。

「一週間ほど待たせて頂きます。電話番号は、お会いした時に渡した名刺の裏に書いてあります。時間帯はいつでも構いません。永渕様が決心のついた時に、ご連絡を下さい」

ポケットに入れておいた名刺（ぐちゃぐちゃ）を取り出し裏面を見てみると、確かにそこには携帯の番号が手書きで書かれてあった。パーソナルチェックの筆跡から判断するに、ゼルダが付け足して書いたものなのだろう。

「……………感謝する」

「いえ」

時間が欲しいという俺のこの考えも、恐らくゼルダは予想していたと思う。本当は礼なんて言いたくなかったが、頼んだ側は俺なので仕方なく言っちゃった。

「では、わたしはこれで」

ゼルダは立ち上がり、鞆を持ちテーブルに置いてあった資料をしまう。

「……あれ？ 帰るのか？」

「はい。わたしはこれから、まだ少しやることがありますので」

店に置いてある時計を見ると、現在時刻は八時二十分だった。

こんな時間になってもまだやることがあるのか？ とも思ったが、まあ別に俺もこれといって話したいことは無いのでここで見送るところにする。

「そうか、じゃあな。近いうち連絡する。会計は俺がしとくから気にしないでいいぞ」

「ありがとうございます」

そう言っただけゼルダは背を向けて歩いていった。

「……………」

その背中を見て、改めて女性にしては背が高くモデルのような体型だなと感じた。

……なんでこの女は特別支援学校で働いてるのかな？

空のコップを口で持ち上げながら、不意にそんなことを思う。

眼帯をしているとは言え、別に就職先に困るような女とは思えない。恐らく、と言うより絶対に俺より頭も良いだろう。就こうと思えばどんな会社にも就ける筈だ。

あの女は人の思考に入り込むことが何より上手い。稀な才能だが、それは全てにおいて役に立たすことができると言える。

才能の使い方はゼルダ次第だが、俺が出した条件は全て事前に予測されていたのだろう。そうでなければ、あそこまで即座に対応はできなかった筈だ。

その才能はあまりにも人間離れしているんじゃないかとも思い、俺には畏怖すら感じる。

「……………」

……与えられた一週間の内に、ゼルダ本人のことも調べられはし

ないだろうか？

念のため、明日か明後日には相談がてら、あぐりに連絡を入れてみよう。実家が医療関係の仕事をしているあいつなら、多少はサルス学院についても知っているかもしれないし、あぐりなりのコネを使つてゼルダのことも調べてくれるかもしれない。

斎藤の奴にも強力させよう。同じ医療工学科のあいつにも、もしかしたらゼルダが接触している可能性があるかもしれないし、……これはあまり思いたくはないが、斎藤自身が俺をゼルダに紹介したということも考えられる。そこらへんを今度あいつと会う時にも見極めるとしよう。

……今後数日の内にやることといったらこんなものか？
他に思いつくことはなかった。

「……そうと決まれば、今日はもう飯食つて帰るか」
幸い、考える時間が貰えると分かったせいかな食欲が戻ってきた。ゼルダのせいで抱くことになった葛藤も、今では少し落ち着いている。

予備の割り箸を貰うために、俺は店員を呼ぼうと周りを見たら……
「……あれ？」
黒いビジネススーツを着た銀髪の女が俺のすぐ横にいた。
さすがにさっきの今で見間違えることはない。

ゼルダだ。

出入り口まで歩いて行くのを見送った筈だが、何故か戻ってきていた。

「どうした？ 忘れ物か？」

俺は訊いてみるが、生憎テーブル席にゼルダの私物と思われる物は見当たらない。もしかして寮の俺の部屋に忘れ物をしたのかとも思つたが……、

「……いいえ」

ゼルダはそのポーカールフェイスで否定した。

「じゃあ何だ？ 他に俺に用事でもあるのか？」

俺は再び尋ねる。

この女から「タクシー代がないんです」などと言われることは無いだろうが、もしその場合であっても今の俺なら貸してやれる。なにせ、既にこの女からは八万近い金を小切手で貰ってる訳だしな。それくらい義理は通してやってもいい。

「……………永渕様」

だが、やはりこの女に限ってそんなことは言う筈がなく、結果的に常に変化の少ないその口から出たのはこんな言葉だった。

「サルス学院……………、いいえ、このわたし、ゼルダ・ドートリーは、永渕雨中様のお力を必要としています。……………私事とはなりますが、どうかそのお力を貸して下さい」

「……………あつ……………？」

「……………それでは、さようなら」
その言葉を最後に、今度こそゼルダ・ドートリーは去っていった。

サルス学院人事部部长、ゼルダ・ドートリー。
その女は無表情のポーカーフェイスで、格好は見た目からして怪しく、使う言葉は常に事務的なものばかり。

それがゼルダという女のパーソナリティで、それがゼルダ自体のこだわりなんだなと、俺は初めて会話をした時から思い込んでいた。
だが。

この時、俺は確かにゼルダの顔から事務的ではない何らかの感情を垣間見た。

無表情で、ポーカーフェイスで、何を考えているのか分からない顔が常だったゼルダの内面は、その言葉を喋り終えたほんの一瞬だ

け俺の前に浮き出たのだ。

果たしてゼルダが何を思い、どういう意味を込めてあの言葉を言ったのか、この時の俺はまだ分かっていない。

それを知るのは、もう少し後のことになる。

8 (後書き)

永瀬雨中はお金が大好きです。

四月上旬の夜はまだ肌寒かった。吐く息こそ白くはないが、この季節に長袖を手放すには抵抗がある気もする。俺は一度コンビニに入り缶コーヒートのブラックを一つ購入した。帰り道はそれを飲みながら歩く。タバコも吸おうかと思ったが、これ以上吸うと今まで続けてきた禁煙期間が無駄になりそうだったので止めた。残りのタバコは今度、斎藤の奴にでもくれてやることにしよう。あいつは吸わなかった気がしたけど、タダでやると言ったら喜んで受け取る筈だ。

「……濃い一日だったな」

コーヒートを飲んでいたからか、そういった感想が不意に出てきた。今日の出来事を振り返ってみる。

大学からの帰り道にゼルダとの遭遇、サルス学院へのスカウト、最初はそれを断る俺。

その後話だけは聞いてやることにして、ゼルダを部屋に上げ、俺を選んだまでの経緯を聞いた。

俺は激昂した後は、頭を落ち着かせるため、話す場所を部屋からファミレスへと移動。

席に着く順番を待っている最中、タバコを買い、火を貰い、緊張を解いた。

そしてテーブルの席で論争。

結果的にポロポロにされた俺。

報酬に魅了され、プライドを曲げ、スカウトを受けるか否かを考える一週間の猶予を得た。

……。

「……いつの間にか立場が逆転している……」

最初はゼルダが俺にスカウトを受けてくれるよう頼んでいたのが、気づくと最終的には俺がゼルダに時間をくれるよう頼んでいた。

俺は面倒事は嫌いな人間だ。

勉強や子供に関しては、とりわけ関わりたくないと思っ
ている。

だが。

絶対に受けることはない決めていた障害者の相手という仕事を、
俺は少しずつ考え始めていることに気付かされてしまう。

……どうしてそうなったのかは言うまでもない。

相手がどんな手段を使ってきたであれ、『論争』と言うからには
これは俺かゼルダのどちらかが勝者かを決める勝負だ。

どちらかが勝ち、どちらかが負ける。そうだった勝負だ。

まあ、要するに俺は、あのゼルダという女に負けたのだ。

多分、みっともないまでにボロボロに。

「……………」

それなのに、不思議と今回の負けに関しては不快感はあまりな
かった。

なぜか？

大金を掴めるチャンスを買えた。

それもある。

だがそれ以上に、去り際でゼルダが口にしたあの言葉が俺の中
で大きく出ていた。

ゼルダ・ドートリーは、永瀧雨中様のお力を必要として
います。

頭の中で今も再生されるあの女のあの言葉。

この言動の意味が今でも気になって仕方がない。

事前の対策や行動の予測、それらの完璧さを俺に見せつけてきた
ゼルダにとって、最後に発したあの言葉は余計だ。

交渉の優位を保ちたいのなら、なぜ最後あそこで謙遜した姿を
残していく必要がある？

散々にゼルダ・ドートリーの合理性というものを思い知らされて上で、俺にはそこだけは妙に腑に落ちなかった。そう。

確かに今の俺には不快感はそんなにない。

だがそれは別に、勝負に負けたことでカタルシスを体験したとかそういうわけではなく……。

頭の中の大部分が、ゼルダの去り際の一言に対する違和感で占めていたからだった。

「……………んっ？」

コーヒーを飲み終わり、通りかかった自動販売機横に置いてあるゴミ箱に缶を投入したところで、俺はそれに気づいた。

ズボンの右ポケットに何かが入ってる。

手を入れてみると十字架の刻印が彫られたジッポーが出てきた。

「……………げっ!？」

ゼルダに返すのを忘れていた。

喫煙室で火を点けた後、そのまま我物のようにポケットに突っ込んでいたせいだ。返すタイミングは普通にあっただのに、どうしてかタバコを吸い終わると同時に頭からすっかり抜けてた。

っーか言えよ、あの女。

やっぱり忘れ物あったじゃん。

「いや、悪いのは俺の方が」

見たところ高そうな一品には見えないが、このまま借りパクするのも気が引ける。

返す手段として思いつくのは手渡しか郵送かの二択だが、後者の場合はまずどこに送ればいいのか分からない。ゼルダから貰った名刺にはあいつの携帯番号は書いてあるが、サルス学院の番号や住所といったものは書いていなかった。……………どこまで機密主義なんだよあそこは。

「ハロー、おにーさん」

突如、後ろから声を掛けられた。

「!？」

即座に体ごと振り返り、自販機に背を向け、俺は両腕に力を込めた。

目の前を見る。

二十歳くらいの歳下の男共が三人。見るからに知恵の足りなさそうな面を持ちながらも、それに自覚もせず他人のことを馬鹿にしてそうな連中がそこに立っていた。

見るからに不良だ。

「誰だお前ら」

向かって右の髪の色を金色に染めた男は、両腕をポケットに突っ込み何かを隠し持っている。携帯電話とかそういったものなら別にいいが、男のピエロみたいに不気味にニヤついた顔が明らかに凶器の類を持っているぞと主張していた。

その左、三人の内、真ん中に立っているはパーカーを着て腹ポケットに手を入れていた茶髪の男。こいつが俺に話しかけてきたのだろう。一見フランクな印象を与えてはいるが、耳や鼻に馬鹿みたいにピアスの穴を開け、無駄に体裁を飾っている。そして腹ポケットの中で動いている手が、やはり凶器の所有を表明。

最後に向かつて左。三人の中では一番背が高く、唯一ポケットに手を入れていない黒髪の男。他の二人と違って凶器のような物を持つてはいなさそうだが、さっきから手を開いたり閉じたりして、何やら人を殴る準備体操でもしているかのように見える。

「んー？ 誰だろうね？」

真ん中の男は喋りだした。

「おれたちが誰かなんてどうでもいいんじゃない？」

「そうそう」と右の男。

「……………」

左の男は何も喋らなかつた。

視界の届く範囲でこいつら以外の人間を探す。

馬鹿共の後ろにはこの田舎町でなんの需要があるかも分からない有料駐車場があるが、停まっている車は一台として無いのでそこに人がいる可能性はまず無い。

俺が背を向けている自販機の後ろには一枚の屏が建っているが、これの向こうはたしか墓地だった気がする。流石にこの時間に墓参りに来る物好きがいるとも考えられないし、もしかしたら管理人でも居るかもしれないが、塀の向こうじゃ居たところでこちらの様子に気づくには時間がかかる。

「そんな事よりさ？ おにーさんおれらを見て何か渡そうって気にならない？」

茶髪がなんか言っている気がするが無視。

俺が歩いてきた右側の道を見るが特にこちらに向かつてくる人間はいない。

寮の方へ続く左側の道も二〇メートル程先に十字路があるくらいで、他には何も無いし誰もいない。

「ちよつと聞いている？ おにーさんさ、耳はちゃんとついてんのかな？」

この町の警察も質は知れてる。率先してパトロールをするような勤労なお巡りもいないし、パトカーを使った巡回にしたって人通りの多いファミレスの周辺等を回るだけでそれ以外は大して気にかけていない。

ましてやこの辺は本当に光源が少なく、通り道にしても普通だったら別の道を使う。

事実、俺とこの馬鹿共の周り半径数十メートルに渡って光源と呼べるものは、この俺の後ろにある自販機しかなかった。

「あ？ もしかして誰かが助けを呼んでくれるじゃないかって期待してる？」

茶髪は言った。俺の目の動きから何かを察したらしい。

「……だとしたら何だ」

「むただって」

今度は金髪がポケットから手を出しながらに言う。ついでにポケットに隠し持っていたものも出てきた。てっきりバタフライナイフでも隠し持っていたのかと思ったが、俺の予想は少しばかり外れ、持っていたのはダガーだ。

刃渡りは大体一〇センチ弱。殺傷能力は十分にありそうな代物。

どうせこんな面してる奴の頭の中に銃刀法違反なんて単語は存在していないんだろうが、どうしてそんな、いざという時言い訳の利かない物を持ち歩くのかね？

鼻で嘲笑ってやるうかと思っただが、とりあえずそれは止めておこう。途端に左にいるゴリラの拳が飛んでくる気がしてならない。

「……どうして無理だっかわかる」

「はー？ おにーさん目もついてないの？」

茶髪が腹ポケットから何かを出した。タバコ程のサイズの黒い物体。

護身用に使われる小型のスタンガンだ。

どうも男が持つには小さいように見えたが、茶髪の腹ポケットの中にはまだ色々と他の何かが入っている。馬鹿なりに頭を使ったことに少しばかり関心した。小型のスタンガンは威力に劣るがそれを他の凶器で補おうという訳か。

「ここらへんはね、めったに人は通らないの。俺たちももう五回くらいここらでやってんだけどさ、一度として別の人に見られたことはないわけ。わかる？」

左のゴリラは相変わらず無言。

ただ威嚇するかのように俺のことを見ており、手も未だにグーパーしている。

……ゴリラがグーパーしているとか、言い方変えただけで笑えてくるな。

「つまり、今回も誰かに見られることはないという訳か？」

笑いを堪えながら俺は状況を確認していく。

この馬鹿共は、ここらに出没する犯罪の常習犯。説明されるまでもなく、犯罪の内容はゆすりかレイプだろう。数を重ねられる犯罪といったらそこらへんが妥当だ。前者は被害届を出したところでこの町の警察が対策をとってくれるまでは時間がかかるし、後者はどうせ被害者が被害届を出さないで終わる。誰だって傷口を掘り返されるのは嫌だしな。気の弱そうな人を狙えばそれこそ被害届の阻止なんて容易にできそうだ。

さて、こういった状況下で俺がこの馬鹿共に求められてるにはもちろん金だ。もし身体を求められているのだとしたら俺は本当にこいつらの頭の中を疑う。周りに人はいないのでこいつらの言うとおりに何をしてもバレるようなことはないし、警察が来てもこの光源の少なさなら逃走も確実と見ていい。

……………こんなところだろう。

状況確認終了。

最後に俺は、さっきの質問に対する男の返事を待つ。

「そういうこと。ついでに言うと周りにある家もほとんどが空き家で人なんか住んでないから大声だしても無駄だよ。前に女の子とヤツたときなんか叫んでも誰も駆けつけてはこなかったもん。なあ、そうだよな？」

「アハハハハ！！ あったけそんなこと？ ウハッ！！」

……………」

ゴリラは無言だったが、茶髪の馬鹿が無駄に高い声で喋り、癪に障るような金髪の大きな笑い声が響いた。こいつらが言った通り、こんだけ騒いでいても確かに人気が増えることはない。

「そんなわけで俺たちは今絶賛五連勝中なわけ」

「そうか……………」

「というわけで、さっさと有り金すべて……………」

「それを聞いて安心した」

「置いてい……………えっ？」

茶髪が何かを言い終わる前に、俺は右腕に渾身の力を込める。

姿勢を低くし、右腕を大きく広げ、体中のバネを使い回転力をそれに載せた。

そして殴る。

俺の真後ろにあつた自販機を。

ガシャン！！！！ と、右手はディスプレイを覆う透明の壁を突き抜け、その内側にあつた電照板を砕く。左手で目を隠した。飛び散るプラスチック片や割れた電照板のガラスから目を守る意味もあったが、なによりもその後に来るだろう本命で失明するのを防ぐ意味合いがあつた。

半壊した自販機から激しいスパークが発生。

パンツ！ と小さな閃光が瞬き、それを最後に自販機の照明は消失した。

これが何を意味するかは説明するまでもない。

「てめえ！？」

「何だ？ 何しやがつた！？」

さきほどの閃光で目をやられたのか、金髪と茶髪の馬鹿がアホみたいな声を上げている。

しかしこの状況で目が見える見えなさはほとんど関係はない。

既にここらで唯一の光源は消え失せ、一帯は真っ暗闇になつたのだから。

「くっそがあああ！！」

聞いたことのない声が響く。ゴリラの声だ。

俺はすぐさま今の位置から離れると、すぐにドカンッ！ と何かがかかかにぶつかる音が耳に入ってきた。俺の意図に気づいたかどうかは知らないが、とにかく視界が奪われたことで俺への攻撃を試みたのだろう。

その結果自販機と衝突したな、あのゴリラ？

暗闇で様子は見れないのは残念だが、今はとりあえず放って置く。俺は記憶を頼りに金髪が立っていた辺りに移動し、すぐさま運任せで回し蹴りを繰り返した。

「ガハアツ！」

命中。左足から伝わってくる感触が金髪の腹を左腕ごと蹴ることに成功した。そのまま地面を転がっていく音も鳴ったのでかなりの確に脚が入ってくれたのだろう。反動を受けた左足が快感を感じている。

地面に転がった衝動でダガーで自分の腹でも刺してくれたら手間が省けると思っただが、そこまで運は味方しないらしい。なにかの金属が地面に落ちるような音がした。

あとダメージを与えてないのは茶髪だけ。

そこで金髪同様に茶髪がいた辺りで適当に脚を振り回してみるが手応えはなかった。

……移動したか。

自販機の放電を使った目眩ましなんて数秒程度しか期待してないが、それでもその数秒の内に俺はゴリラ以外の二人は叩くつもりでいたので少しばかり残念だった。喧嘩は鉄則として弱い奴から潰す。三人の中で一番に厄介そうなのは今も自販機あたりで右往左往してると思われるあのゴリラで、金髪と茶髪は一応武器を持ってはいたが、ガタイは俺以下でどうせ本当に人を刺す勇氣も無いザコだろう。可能ならそういったザコは真っ先に叩いておきたかったが……

……作戦変更！

頭を切り替え先ほど地面に落ちた音がした金髪のダガーを足で探す。五秒とかからず見つけ、それを右手で逆手に持つ。本当は順手に持つのが普通なのだが、この暗闇でそう持った場合、間違えて胸などに刺さる恐れもある。

腰を低くして再び自販機へと近づくと、ゴリラの荒い息が聞こえた。

「くそっ！ くそっ！！」

その声と暗闇を移動する規則性のない光の動きで、茶髪が焦った顔でスタンガンを振り回しているのが容易に想像できた。それで自分に近づいて来れないと思っっているのなら重症だ。

結果的にそれが自分の位置を俺に教えている。

スタンガンに当たらないように近寄り、蹴りを食らわせてやった。「オエ！！」

偶然にも蹴りは腹ポケットの上に当たっただけ。そこに何が入っていたのかは知らないが、何故か百円ライターを地面に叩きつけて生じるような小爆発が連続して起きた。

パンツ！ パンツ！！ パンパンツ！！

生じる灯りで、少しの間茶髪の馬鹿面が見れる。

「アアアアアアー ……！！！！！！」

……本当に何が入っていたんだろっねアレ？

死んではいなさそうだったが、茶髪もまたドサリと地面に倒れ伏す。

復活した時のためにスタンガンは回収。暗闇だったが手探りでも案外すぐに見つかった。

……あと一人だ。

このままの勢いで三勝目指して頑張ります俺。

二勝くらいはしておきたい、ってさっき心に思ったことについては忘れて下さい。

「……………」

まだ暗闇に目は慣れず辺りは依然として真っ暗なままだが、馬鹿共の位置関係は大体把握した。金髪がいる方へ足を運びながら、俺はポケットからジツポーを取り出し火を点ける。

「ひいひい！？」

「あつ、いた」

声のした方へ火を近づけ、金髪の顔を照らす。金髪は墓地の屏に背中をあわせ肩を震わせながら立っていた。恐怖で染まったその顔

は最初に見せた余裕綽々の笑顔とは一八〇度違っている。暗闇の中で思いつ切り蹴られ、仲間二人の絶叫を聞いたことでこうなったのだろう。

ジツポアの火を消し、左の拳で腹を三発ほど殴る。

「ゲホツ！ ガハツ！」

抵抗はされなかった。再び火を点け、空いた左手で首を抑えつけた。

そのまま、屏に頭をぶつけさせる。屏はコンクリートでできていたので痛かっただろうが、この金髪と俺の痛覚は共有じゃないので気にしない。

「アアツ……………」

金髪が呻く。

「……………たす……………け……………」

「はぁ？」

金髪から「助けて」とか言う声が聞こえたけど、それはちょっと言ってる意味が分からない。それは誰に向かって言っているのだ？

「お前ら言ったんだろ？ こころ辺は滅多に人が来ないから何しても大丈夫だ、つてさあ」

「……………そ……………んな……………」

「確かにその通りだったな。ゴリラが刺された時叫び声上がったけど無駄に響くだけで周りの家の電気が点くこともないしさ、茶髪の奴が変な小爆発起こしても未だにどっからも警報とか聞こえて来ねえんだもん」

ジツポアの火を近づけ、首を掴む左手の力も強める。

なんか楽しくなってきた。

「……………あぁ……………」

「自販機にしたってさ、最近じゃぶつ壊したら警報がなるんだぜフツー？ あの自販機、古かったからそれはなかったみたいんだけどさ、もしかしてお前らそれも考えてるわけ？ すげーな最近の不良は……」

火で金髪の前髪をチリチリと焦がしてみる。

金髪がちよびちよびと黒髪に染まっていった。

さて、続いてどんな反応が待っているのか楽しみにしていたら……

「……………お……………あ……………だ……………」

「あん？」

「お……………あ……………いだ……………」

「……………？……………」

なんて言っているのか分からなかったので首を絞めている左手を一旦離した。

金髪は屏に背中を預ける形で崩れ、ゲホッゲホッと自分の首を抑えながら酸素を求めぬ。

「お前、今なんて言った？」

俺は尋ねる。

「終わりだつて言ったんだよバカが！！」

金髪が吠えた。

まだ元気だねお前。

「何言つてんだ？」

「山崎の奴を刺したんだろ！？ さっき刺したつて言ったよなあ！

？ つーことは凶器にはお前の指紋が付いてるってわけだろーがよ

！！

「……………」

山崎って誰だよ？

あのゴリラか？

「だったらその凶器を警察に持っていけばお前はブタ箱行きだあ！

！ 俺はもうお前の顔を覚えたぞ！ ザマーみやがれ！！」

「……………」

……………うわー。

ここまで頭が腐つてるとは思わなかったよマジで。

お前らみたいな強盗強姦の常習犯が警察に言ったらどうなるか分かってもないのかよ。強姦に関しては被害届出されてないかもしれ

ないけど、強盗に関しては多分お前ら警察のリストに載ってるぞ絶対。

そしてお前は口封じに俺に殺される可能性とかも一切考えないのな。別に俺も殺しはしないけどさ、そこらへんの可能性は考慮して言葉使ったほうがいいぞ。分かっててやってるならそれはそれで尊敬に値するけどよ。

「アハツ！ アハハハハハハ！！」

笑い出す金髪。

もうコイツ、完全にヤケになってるな。

もしかしたら麻薬とかもやってるのかもしれない。

「……………」

……………少し、現実に戻してやるとしよう。

「おい」

「ハハハハハ……………ハ？」

「これ、見えるか？」

俺は右手に持つジツポアの火で左手を灯す。

「そもそも散々俺に殴られたり首掴まれたりしているくせに、気づいていないってのもおかしいだろ？俺だってお前らほど馬鹿じゃないんだから人を刺す道具持つときに素手なんか使わねえよ」

「あつ……………ああ……………」

「つけてるものが何か分かるか？分かるよな？」

左手を問わず右手にもそれはついてているが、別に両方共を見せつけることもないだろう。

そこにあるのは白い手袋。

当たり前だが指紋なんか残らない。

「……………あああああ」

信じられないような物を見る金髪。別にそこまで驚くことじゃないだろうが、この馬鹿にとってはどうもさっきの一言が最後の切り札だったらしい。

本当に頭終わってるねお前。

「ついでに、ゴリラを刺すのに使ったナイフ……じゃなかったダガーはお前の物だから、そこに付いている指紋も当然お前のものだけだから」

「あああああああ！」

「あとあのダガーは絶対に救急車が来るまで抜くなよ？ 俺は別に構わないけど山崎……じゃなかったゴリラが今後松葉杖無しじゃ歩けなくなるから」

「あああああああああああああ！！！！！！」
うるせーなコイツ。

補足しておく、俺は蹴る時は足の裏を使ってないから靴跡から身元を特定されることもない。これも言おうかと思っただけどコレ以上叫ばれると耳に響くから止めた。

「お前近所迷惑だぞ」

誰もいないけどな。

俺は再び左手で金髪の首を掴み力を込める。

「あ………かつ………か」

絶叫は止み、代わりに微かな空気が茶髪の口から漏れる。

空気を求めて喉仏が上下するのが手袋越しでも左手に伝わってきた。

何故か、そのことに俺は興奮を感じる。

「お前ら、五連勝中とか言ったな？」

右手に持つジッポウの火を消し、ポケットにしまった。

暗闇だ。

視覚は殺され、聴覚は際立つ。

ゼルダと離れたときののように、声にドスを効かせた。

恐怖感も倍増するはずだ。

金髪の心臓の音が聞こえてくる気もするが、さすがにこれは俺の気のせいだろう。

「その五勝の内、一回でも人を殺したか？」

「……………！！！！！！」

ブンブンと金髪が必死で首を左右に振るのが分かる。
やっぱり殺しはしていないらしい。

「じゃあ次だ。その五勝の内、レイプは何回だ？」

「……………！」

「一回？」

「……………」

「二回？」

「……………」

「三回？」

「……………！！」

今度は首を上下に振っている。

なるほど三回か。元々は強請よりもそっちが目的なんだな。

「中々のゲスだな。吐き気がする」

「……………お……………」

「相手の気持ちを考えてことはあるか？ どうせ避妊とかもしてないだろ？ よかったなー、お前は男で。妊娠とかする心配はないもんなあ？ ええ？」

「……………ごお……………」

「ん？」

またなんか言いたいらしい。

今度は離さず、少しだけ絞めている手の力を緩めてやった。

「なんだ？ 何が言いたい？」

「……………な……………い……………」

「はい？」

「……………ごめん……………なさい」

「……………」

「ごめんなさい。もうしません。あやまります」

「……………」

「警察にもいきます。女の人にもあやまります。男の人からとったお金もかえします」

ゴリラは足にダガーが刺さっている。そのダガーは俺のではなく金髪のだ。

金髪はスタンガンを食らって伸びている。そのスタンガンは俺のではなく茶髪のだ。

茶髪はほとんど自爆する形で地面に倒れた。俺に繋がる証拠はそこにはない。

「……………完璧じゃねーか」

相手が馬鹿共だったとはいえ、三対一でここまでやれたのは清々しい。

殺そうと思えば殺せる。

バれることもまずない。

そういった優越感がなにより俺をニヤけさせ、大声を出して笑いたくなくなってくる。

だが、それ以上は留まろう。

それをしてしまうと、俺もコイツら下衆野郎共と同類になる気がした。

今はとりあえず、コイツらを潰した理由は、コイツらに脅されたり犯されたりした被害者のためにとった行動だと思っことにしておく。

若干だが暗闇にも目が慣れてきた。

1 (後書き)

ダガーは銃刀法違反(刃体の長さが6センチメートルをこえる刃物)になるので持ってたらず捕まります。海外の通販で買うことができますが、コレクション意外の用途で購入するのは止めましょう。

作中のスタンガンにはコッククロフト・ウォルトン回路が使われているので、スイッチさえショートさせてしまえば放電は起こせません。持っていて銃刀法違反にはなりません。

昔私が作ったスタンガンは強く握っただけで簡単にスイッチがオンになりました。

辺りには例のイオンの匂いに加え、男共が失禁したと思われる大小便の匂いがしてきたので、俺は早々にその場から離れることにした。慣れてきた目で半壊した自販機の前までたどり着き、念のためゴミ箱の中から俺の飲んだコーヒの缶を回収。ゴリラのうめき声が近くで聞こえたが特に声をかける理由もなかったので見ずにスル¹。

光源のあるところまで移動して忘れ物がないかの確認した後、斎藤に携帯で連絡を入れた。匿名で先ほどの場所に救急車と警察を超越すよう頼み、ついでに今後三、四日の間に暇な日が無いかを聞くいつでもいいと言われたので、明日大学で会う約束を入れ、そこで会話を終わらせる。俺はそのまま寮までなるべく人目につかない道を選んで歩いた。

寮に着くとまずシャワーを浴び、今日着た服や手袋、下着に至るまで全部をゴミ袋に入れ、明日の朝に出し忘れないよう玄関にそれを置いた。その後はノートパソコンを使ってパーソナルエックの現金化の仕方や、無駄だと思ったが念のためサルス学院の内部についても適当に調べ、最後にあぐり死に三、四日の内にインターネット電話で連絡を超越すようにメールした。

そのメールを最後に俺は眠気に耐え切れなくなり、部屋の電気を消してベッドに入った。

こうして、あの女に会ったことにより始まった無駄に濃い一日は幕を閉じたのだ。

そしてそれから五日後。

俺はゼルダに電話を入れ、一つの条件付きでサルス学院のスカウトを承諾する旨を伝えた。

それに対するゼルダの答えはただの一言。

いかにもあの女らしい、本当に無駄の無い言の葉だった。

『ようこそサルス学院へ』

電話越しでそれを聞き俺には、なぜかそれが、地獄への招待のよう
うに聞こえた。

2 (後書き)

三馬鹿(茶髪・金髪・ゴリラ)
こいつらのその後は次の話で。

中間あぐり

実家が沖縄なので雨中とはスカイプでやりとりしています。中卒なので、営業のためには雨中の医療関係の免許を頼りにしています。

斎藤柳緑

ゼルダに紹介した犯人ではありませんでした。ゼルダとも面識はありません。タバコは受け取りました。

スーツというのを俺は未だかつて着たことがないし、そもそも一着も持つてはいない。大学の入学式では「ご自由の服装でお越しください」の言葉に従い空気を読まずに私服で行ったし、就活に関しては中間あぐりとの付き合いもあったので必要はないと思って買わなかった。

そんなわけで俺が今回生まれて初めて買ったスーツは紳士服店の店員に選ばせた無地のネイビースーツで、ズボンとネクタイ付きで二万九千八百円の代物。店員が言うには就職活動をする学生がよく着るものらしく、とりあえず無難だし考えるのも面倒くさかったので、それと一緒にシャツとベストを何枚か購入して俺の初めてのスーツ選びは終了。購入したものは日付指定で寮の方へ送ってもらうことにした。

そして一週間後。寮に届いたそれらを試しに着てみると、俺はネクタイの付け方が分からないことに気づいた。ネットで調べてる時間もなかったので、もういいやこれでもいい適当な感じで出来上がったのは、ネクタイ無しのベストにスーツという格好。鏡を見てベストの色とスーツの色が違っていることにも今になって気づいた。

「どうよこれ？」

「お似合いですよ」

そう俺の質問に答えてくれたのは、俺の部屋の数少ない家具である椅子に座っているゼルダ・ドートリーという女。背の高いモデルのような体型で黒いビジネススーツを着こなし、ついでにその右目には黒の眼帯をしている。

およそ二週間ぶりに会うにしては久しぶりといった感じはしない。電話を使い質問や確認などで定期的にやり取りをしていたからというもあるが、それ以上に、ここ何日も俺自身がこの女について調べ回っていたというのが大きい。

結果的に、その独自調査は何一つ情報を得ることがない無駄なものとなったが、逆にそれはこの女がそれほどまでに秘密の多い女というのが分かったので良しとしよう。斎藤の奴にしても、結局はゼルダと面識はないらしかつた。

そうなるも俺をゼルダに紹介した馬鹿の正体については諦めるしかないが、正直な話、二週間も経ってしまえば怒りはとっくのとうに治まってきてしまっている。

……それにあの時のストレスはゴリラ達を半殺しにしたせいで、あの日の内にほとんど消化しちまったしな。

あの後テレビでもちよつとしたニュースとして取り上げられたらしく、どういう訳かゴリラ達が自動販売機の金を盗もうとして、その取り分をめぐって仲間割れをしたことになったらしい。

どうなってるんだろうね最近の警察は？

金髪にしても、俺のことは警察に一切話すなど脅しはしたが、なにも自販機の罪まで被れとは言っていないだけだな。

結局コイツらは強姦や強請の罪もバシレて今後数年はブタ箱に収まるらしい。

今度バナナでも送りつけてやるか。

「……刑務所って食べ物送れんのかな？」

「どうしました？」

「いや、なんでもない」

俺はゼルダの方へ向き、服装を整える。

「念のために聞くけどネクタイ無しってありなのか？」

「動きやすい格好であれば構いません。必要な場合がありますらこちらの方で用意させて頂きます」

相変わらずの待遇の良さだな。

それでも一応着けないネクタイはスーツケースに入れておいた。ケースの中には他にも残りのシャツやベストに普段着等が何枚か、それから大学で使っていた白衣も念のため入っている。

「学院の中で衣類とか買えたりするんだっけ？」

「はい。購入にはカードが使えますし、カードがない場合でも後払いという形で給料から差し引いておくこともできます」

……タダにはならねえのか。別にいいけど。

スーツケースを閉じて、四桁の番号でロックをする。

「肉とか野菜とかの食料とかは買えるのか？ それとも食事は全て食堂を使わなきゃいけないとか……？」

「売ってはいませんが少々価格が高くなっていますね。生徒の健康を第一に考えていますので、私たちの管理から外れてしまう野菜や生肉などの物資には細心の注意を払い、できるだけ良質な物を仕入れていますから」

「つまり、食堂を利用した方が得だと？」

「ええ」

学院の外で買って中に持ち込むのはダメなんだろうな。

ゼルダにサルス学院のスカウトを受ける旨を伝えた次の日、速達でサルス学院から俺宛にいくつかの資料が送られてきた。そしてその中の一つにあったのが『職員寮の案内』というもので、これの一頁目に書かれていた内容によると、サルス学院の職員は全員が学院内にある職員寮で生活することが義務となっているらしい。

サルス学院の機密性を考えれば、そのことについてはまあ予想していたし、案内の中に載ってあった寮の部屋の写真はこの部屋なんかよりも格段と広く機能性があったので特に文句を言う気はなかった。そもそもこんなベッドとテーブルと椅子しか家具が無い部屋に思い入れなんてものも無いしな。

スーツケースとは別に用意したトランクを開き、中に入ってる物を確かめる。

そこに入っているのは特殊な形のドライバーやビニル製の透明チューブ、金属製ワイヤー、その他名前すら付いていない俺が自作した医療工具の数々。

一つ一つの備品に故障や破損が無いかを確認、それが確認し終わると一旦トランクの中身がゼルダに見えるように向けた。

「こういった類のものは学院の中にも売ってるか？」

「……………」

ゼルダの片目が動き、トランクの中の物を確認していく。

「……………それらは何ですか？」

「売ってるか売っていないかだけ知りたい」

「学院には売っていません」

「そうか」

……………やっぱ専門的な工具までは学院内で買うことはできないか。いざとなったら大学に連絡をとって送ってもらうことになるかもしれない。

トランクを閉じて、六桁の番号でロックをし、スーツケースの上にそれを置く。俺がサルス学院に持っていく荷物はこれで全部の筈だ。

念のため、部屋を見渡して他に持っていく物がないかを探してみる。コーヒーマーカーが一瞬目に入ったが、少々嵩張るので持っていくのは止めた。そもそもスーツケースにもトランクにもこれ以上の荷物は入らない。

学院にはカフェテリアもあると資料に書いてあったし、前にゼルダとの話に出てきたコーヒー好きの奴に会えればコーヒーくらい手に入る気もするので別に必要はないだろう。

「よし」

俺はスーツケースとトランクを持ち、ゼルダの方を向いた。

恐らくこれから言う一言を最後に、当分の間はこの部屋には帰ってこないだろう。必要な荷物は全て学院に持ったし、そもそも治外法権があるサルス学院に入った後、近所のスーパーに買い物に行くような気楽さで外に出られるとも思えない。

サルス学院がある正確な場所も、これから学院に向かおうとする今でも未だに教えられていなかった。日本にある『支部』に向かうとだけは電話で知らされているが、その日本というのが何処を示すのかも不明。北海道かもしれないし、既に米軍基地のある沖縄という

可能性だつてある。もしかしたら日本の領土にあるだけの、どこかの小さな島という可能性だつて無いわけじゃない。

俺が貰うことになる給料は、たとえそういつた職場に連れていかれても文句が言えないような額だ。なんかの映画みたいに時給一万二〇〇〇円の臨床試験のアルバイトをやらされたり、日給五万円の死体運びをするわけではないが、それでもそれなりの覚悟は既にしている。

……給料分の仕事はしてやるさ。

それが特別支援学校の教師であれ、障害者の相手であれ、なんであれ。

できないようなら俺から辞表でも出してやる。

それで大学から与えられた単位無条件取得の特例が無効になるかもしれないが、その時は今度は俺自身が最浜医科大学を脅してやればいい。俺の裏口入学の件や卒業生がサルス学院で引き起こした不祥事など、武器にできるネタはいくらでもある。

俺がサルス学院に行く結果、何が俺を手にしようとも何が俺の手から離れようとも、最終的に俺にメリットというものが残ってもデメリットというものまでは残らない筈だ。

そう。

これでいい。

サルス学院で起こりうる事への覚悟はできた。

その後の保険も色々と整っている。

最浜医科大学やサルス学院が損をするようなことはあつても、俺が損をすることはない。

荷物を持つ白い手袋をはめた両腕に力を込めて俺は言った。

「準備完了だ。いつでも行ける」

こうして俺は三年近く生活してきたこの部屋に暫しの別れをし、国際的な特別支援学校『サルス学院』へと向かった。

あらゆる可能性を考慮した気でいながら、あくまでそれらが、俺が生きていくという仮定の上で成り立っているのだと考えもしないまま。

【サルス学院】

世界で初の国際的な特別支援学校。身体的または精神的な『障害』を持つ子供を専門に受け入れ、社会的自立を目的とした授業を施すための教育機関。ただし通常の特別支援学校とは異なって、それらの『障害』の治療、分析、研究も同時に行う医療機関としての二面性も持つ。

もともとは『障害』の治療法を研究していた小さな医療機関であったが、新薬の開発を成功させたことでアメリカにある大手の製薬会社と提携を結び拡大。当初はアメリカ国内に数力所の同様な医療施設を建てただけだったが、薬品の開発や治療法の発見等の成果をあげることに徐々に国外まで規模を伸ばしていき、その後、効率化を図る目的で特別支援学校に形を変え現在にまで至った。

『本部』を発祥の地アメリカに置き、約三十の『支部』を世界中に建てていると言われるが、その正確な数や点在している場所についての詳細は一切公表されていない。

サルス学院は学院に籍を置く生徒の個人情報保護をこれの理由としてはいるが、その真意は不明。プロパガンダの疑いも当然のように各国で流れているが、国外にある全てのサルス学院は治外法権をアメリカに依っているため、他国はコレを確かめる正当な術を持つことができないものとなっている。

目が覚めるとサルス学院に着いていた。

いや、こんなことを言うと、あたかも俺が寝ている間に連れてこられたかのように聞こえるがそうじゃない。普通にゼルダが運転する車に乗っていたら俺がいつのまにか寝ていただけだ。催眠ガスだとかそういう類の物も特に車の中には搭載されていなかったのであしからず。

ゼルダが運転する車に乗っていた時間は大体二時間弱。その間俺とゼルダとの間で交わされた会話の合計時間は見事にゼロ分。俺から言葉を振らない限りは絶対にゼルダからは言葉を発せられることはなかったのだから俺は寝たのだった。

多少は無駄口も大事だとは思っただけどね俺も……。
すぐ寝た俺が言えた台詞でもねえけどさ。

既に携帯電話は圏外になっていたのでGPSを使ってここが日本のどこら辺なのかも調べられない。本州からは流石に出ていないだろうが、それでも大学まで戻るのはどういったルートを使えばいいのかなどは自分で知っておきたかった。

俺は車から降りて、なにか地名を判断できる物を探す。

真っ先に目に入ったのが遠くに見える塀で、明らかに高さが五メートル近くある。刑務所かよこは、と一瞬思いたくなくなったが、全面は白く塗装されており塀のデカさ以外にそれほどの威圧感を持つことはない。白などの明るい色が人に開放的なイメージを与えるというのを昔テレビで見たが、それを意識しているのかもしれない。

一応は考えられているのだなと思ったが、よくよく考えてみれば、サルス学院は医療機関でもあるのだから灰色のコンクリート塀をそのまま使ったのはありえないことだったことに気づく。それと刑務所の壁も最近は普通に白ばかりだ。

その白い塀のせいでそれより向こうの景色はほとんど見れなかつ

た。少なくとも学院は高層の建物があるような地域に置かれているわけではないらしい。

目で塀の先を辿っていくと、一箇所だけその白色が途切れているのに気づいた。

門だ。塀の高さ同様にこちらもかなりデカイ。

考えるまでもなく、あそこがサルス学院の入り口なのだわかった。高速道路の入口とかに設置されてあるゲートが門から学院の敷地内へと延びる車道の上にも同じように設置されている。その先分かれた道の一本が今俺が立っている学院の駐車場らしき場所に延びているのを見ると、俺も寝ている間にあの門をくぐっていたというのを理解した。

……既にここはアメリカってことになるのか。

正確には治外法権が適用されているだけで日本国内であることには変わらないんだけどな。

白い塀に目を戻し、またその先を辿ろうとしたところで……、

「おじさん、だれ？」

……………おじ？

なんか今まで生きてきた中でベスト3に入るくらいの屈辱的な言葉が背後から聞こえたんですけど？

なんだろうね、この現実という名の刃物で心臓を抉られたような絶望感。

すっげー痛い。

「ねえ、おじさん？」

……………

また聞こえた。

この前会ったどこかの金髪は俺のことを「おにーさん」と言っていた。言ってくれていた。だから今聞こえた「おじさん」とは俺のことを指しているわけではない。……………うん。

だって俺まだ二三歳、大学四年生。「おにーさん」は正解だけど
「おじさん」は不正解だ。

……なんだあの金髪頭いいじゃん。

殴ってゴメンな。今度バナナ送るからな。

「おじさん？」

「……………」

……あれ、なんで肩が震えんだろう俺？

なんで俺今地面見てんだろう？

おじさんって誰だよ？

「ねえ」

グイ、と右手の袖を小さな力で引っ張られた。服を伝ってその振動が背中にドスンと押し寄せてくる。あはは、すっげー重たそう。誰の背中だよまったく。

「おじさん」

「……………」

うん、そうです、俺の背中です。もういいよ別に。

袖を引っ張られるのは嫌なので、いい加減振り返ることにする。

「おじ」

「黙れ」

腕を振り払い、身体の向きを変えて大人げ無さ対峙した。

そこに立っていたのは白衣を着た少女。俺より頭二つ分小さい身長で、俺を見上げるように顔を向けていた。髪型はボブカットの黒。着ている白衣のおかげでそれが目立って見えたが、組み合わせとしてはなかなか似合っている。

……つか、なんで白衣？

一瞬俺が持ってきたやつかと思ったが、この娘が着ている白衣は俺のとは明らかにサイズが違う。恐らくは最初から着ていたものだ。最近の女の子の間ではこんなのが流行ってるのかな？

少女は意外にも、脅すような口調で俺が発した第一声にはなんの恐れも見せていない。ただじつと観察するかのようこちらを見て

いた。

「……………」

「……………何だよ？」

「おじさんは不審者ですか？」

「怪しい人に向かつて不審者ですかって聞くのはどうかと思うが、俺が明らかに怒っている顔をしているのにまだ『おじさん』って言い続けるのもどうかと思うぞ」

「……………じゃあ、不審者さん」

「じゃあつて何だよ!？」

俺はしゃがんで少女と目の高さを合わせた。

「いいか、俺はまだ二三歳で『おじさん』と呼ばれるにはまだ後十年の猶予がある」

「それつてだれが決めたの？」

「黙れ。とにかくさっき言ったことをさっさと訂正しなさい。そして『おじさん』じゃなくて『お兄さん』と呼べ」

「歳下の少女に『お兄さん』って呼ぶように強要するのもどうかと思うけど？」

「黙れ。お前だつて将来は『おばさん』じゃなくて『お姉さん』と呼ばれ続けたいだろうがよ」

「まあ、どちらかと言えば」

「俺はそれが将来じゃなくて現在なんだよ。今呼ばれたいんだよ。分かるか？」

「なるほど」

「よし、分かったな。じゃあ実際言ってみろ。それでさっきのことは許してやる」

「……………お姉さん」

「そつちじゃねえよ!！」

思わず地面に尻餅をつく。げっ!？ 新品のスーツが!

急いで立ち上がり汚れを払うと、少女も一緒にズボンを手で叩いてくれた。思ったよりいい子っぽい。

「それで、お姉さん是不審者？」

「不審者じゃねえし、お姉さんでもねえよ。ちゃんとここに入る許可貰ってるよ」

本当は寝てたから許可貰ってるかどうかも分からんけどな。

「不審者じゃないなら、おじ……お姉さんは何者？」

「お前今おじさんって言おうとしたろ？」

「おじさんは何者？」

「元に戻ってんじゃねーか！？　まだお姉さんがマシだったぞ！」

だからって『お姉さん』で妥協されたくはないけどな。

もうこの際だから名前を名乗ることにした。

「俺は永淵雨中だ。『雨』の『中』って書いて『うちゅう』。五月からここで教員をやることになった現役大学生だ」

なんか自分で言ってる色々と矛盾があるように思えるけどこの際全部無視しよう。説明するのも面倒臭い。とりあえず現役大学生ってことを強調しておいた。

「二三歳で現役大学生って……浪人？」

「黙れ。とりあえずもうお姉さんとか言うなよ。名前教えたんだから歳上に対する敬意を込めて『永淵様』とか『雨中さん』とかそう呼べ」

「……………お兄ちゃん」

「……………もうやだこの娘。」

なんでそこで変化球投げてくんだよ。

「お兄ちゃん」

「黙れ。お前みたいのが俺にそんなこと言つと警察が来そうで怖くなくなる」

「警察のお世話になりそうなことをするの？」

「事情の知らない奴が俺が小さい娘に『お兄ちゃん』って呼ばせてる変態野郎だと勘違いして警察に通報するんだよ」

「過去にそういった経験が？」

「一度だけあった」

「あったんだ」

「あったんだよ。」

「とにかく『お兄ちゃん』は却下だ。二者択一、『お兄さん』か『永渕様』か『雨中さん』の内一つ選べ」

「……三つあるけど？」

「黙れ。人の揚げ足を取るといい大人になれないぞ」

「じゃあ『うちゅー』で」

「呼び捨てかよ!？」

「あとなんだその若干気の抜けた呼び方は!？」

少女は人差し指を口に当て「うちゅー、ウチュー」と口ずさみ始めた。呼び方を固定させようとしているのかどうかは知らないが俺の前でやるのはよさないかそれ？　なんか知らないけど名前を呼ばれる度に背中が痒くなるんですけど……。

「……変な名前」

「ボソリと失礼なこと言ってるじゃねえよ。最近の親が子供に付ける名前に比べれば幾分かマシなほうだろ」

「雨が降ったらからかわれそんな名前だね」

「そうか？」

「経験ない？」

「名前でからかわれたことは一度もねえな」

そもそも俺の絶望的な交友関係じゃあ会話する相手なんてのもほとんどいないがな。例外的に斎藤柳緑や中間あぐりなんてのがいるが、あいつらもあいつらで随分と珍しい名前をしているからか、名前に関して特に俺に変なことは言っていないかった。

「……要するに友達がいらないんだね？」

「黙れ。心を読んだかのように喋るじゃねえよ。つーか俺にはつか聞いてないでお前も名前くらい教えるよ」

「また今度ね」

「殴るぞお前」

左手で握り拳を作る。

別に本気で殴る気はないが、脅す意味を込めて拳を見せつけてみた。

「むっ」

しかし、またもこの娘は臆することなく、今度はその左手に注目しだす。

「なんで手袋をしてるの？」

「趣味だ」

「ふーん」

つんつん、と少女は手袋をつけた俺の左手をつつく。

……なんつーか、好奇心が高い娘だな。

行動がウザかったわけではないが、その好奇心がこれ以上向けられるのは嫌だったので俺は両手をポケットにつっこんだ。少女は別段名残惜しそうにするわけでもなく、また別の興味の対象を見つけようと俺の方を観察し出す。

「なあ」

「ん？」

今度は逆に俺が訊いてやる。

「ここって“サルス学院”でいいんだよな？」

「そうだよ」

「ゼルダ・ドートリーって名前の女の人を知ってるか？」

俺をここに連れてきた例の女とは目を覚ましてまだ一度も顔を合わせていない。起きたら既に運転席から姿を消していた。

最初はハメられたとも考えたが、車のキーがアームレストの上に置いてあったのを見ると、どうやらすぐに戻ってくる意思表示らしい。

そこで一応の確認のために、ダメ元で尋ねてみたのだが少女は小さく頷いた。

「知ってる。人事部の人でしょ？」

「部長らしいな。お前みたいなのが名前を聞いてわかるってことはここではそれなりに有名な人なのか？」

「わたしたちの間じゃさすがに知らない人はいないかな？」

「ふむ……」

大学関係者の名前なんて自分の所属している研究室の教授くらいのみか俺は覚えちゃいないが、それでも普通、生徒が学校を切り盛りしているような事務員の名前まで覚えるものなのか？

「どんな人だ？」

「うちゅーより見た目が若い人」

「……………」

俺は無言で左手の薬指を親指の腹に引っ掛け、少女のデコに向けて放つ。

パチーン、っという音がした。

手袋越しの割にはなかなかの威力だな。

「……………痛い」

「お前はどれだけ俺を馬鹿にすれば気がすむんだよ……………。もういいよ認めるよ。俺は年齢の割には老けてるよ。認めっからこれ以上俺を言葉のナイフで決めるのは止める」

「……………別にそういう意味で言ったんじゃないのに」

「今更信用できるかそんな言葉」

それでも少女のデコの一部が赤く腫れていたので摩する程度のこととはしてやった。

特に抵抗する素振りを見せないのもそのまま摩っていると、

ピピピッピピピッ、という謎の機械音が少女の方から聞こえてきた。

「なんの音だ？」

「わたしの携帯」

そう言っただけ少女は白衣のポケットから携帯電話を取り出した。目覚まし時計みたいな音だったがどうやらメールの着信音だったらしい。少女は携帯を開き画面を見つめていた。

……………あれ？

ふと思い出し、俺は自分の携帯を取り出す。

画面の左上にはさっき見たときと変わらず『圏外』の文字が表示されていた。

「……………」

なんでこの娘は携帯が使えるんだ？

疑問に思い少女に声を掛けようとする、

「ごめん、うちゅー」

「どうした？」

「用事ができた」

「え？……………つておい！？」

少女はくるりと俺に背を向け、すたすたと歩き出す。

まだ訊きたいことがあるので俺は追いかけてみようとしたが、少し距離が空いたところで少女はこちらを振り向き、「また今度ね」と言っただけで軽く手を振ってきた。

……………今度つていつだよ？

別に少女の背中が「ついてくるな」と告げていたわけではないが、その言葉と少女の軽い動作に付いて行く気が削がれたので、俺はしよつと気がなく少女を見送ることに留めた。

そして、去っていく少女を目で追っていた先にあった一つの建物を目にする。

「……………」

地上二十階に届きそうなコンクリート構造の高層建築物。特徴的な 恐らくは三角柱のその建物は学院を囲う塀と同じく白を基調としたデザインとなっており、向かって右側の上部側面には『SALUS』とシンボルマークと思しき物が掲げられていた。

少女の背中は俺から離れていくに連れてどんどん小さくなっていく。だが、少し経ってもその姿があつた建物の中へと飲み込まれてい

かないのを見ると、今俺が立っているこの地点からあの建物まではそれなりの距離がありそうだった。もしかしたらあの建物の高さも俺が思っている以上に高いのかもしれない。

だが……、

「あれが学院なのか？」

なんとなくだが、俺にはあの建物から『学び舎』のような雰囲気
が全くもって感じられなかった。海外の学校なんてものは映画くら
いでしか見たことがないが、それでもあの建物の出す情調からは、
医大生という職業柄か、学校ではなく別の物を意識させられる。

即ち、それは『病院』。

大学の研修として無理やり行かされた病院があんなだった気がし
た。

「……………」

いつの間にか、少女の姿は見えなくなっていた。既にあの建物の
中に入ったようだ。

まあ、結局は俺の思い込みに過ぎないか……。

あの少女が入って行ったということは、あれが学院なのだろう。
そもそもサルス学院ってのは国際的な特別支援学校だ。多少の規模
や風情が一般的な学校と変わっていたとしても、それが国際的な立
場としては『普通』なのかもしれない。

それに、治外法権を持つておきながらも世界中にある『サルス学
院』の正確な位置情報が世間から漏れ出さないのも、もしかしたら
こういった「学校らしさ」を一切感じさせていないからなのか……。

「あん？」

ここまで考えて、俺は自分で思ったことの一部に疑問を抱いた。

サルス学院ってのは国際的な特別支援学校だ。

特別支援学校ってのは障害者のための学校だ。

「……………違う」

なんだ？

何かが引っかかる。

何を思っただけは“違う”と考えたんだ？

首と身体を動かし、三六〇度を見返す。

周りがある広大な敷地。

その敷地をを囲う白い塀。

遠くに見える学院と思しき建物。

辺りにあるものを片っ端から確認し、何かの引掛かりがないかを考えていく。

次に頭の中で記憶を再生し、ここに来てから 正確には車で俺が目覚めてからの出来事を思い出していく。

「……あつ」

そして、俺は自分の疑問を理解する。

俺が“違う”と思っただ理由。

それは、無意識の内にここが『特別支援学校』であることに違和感を覚えたからだ。

俺はここに来て最初に出会った白衣を着た少女との会話を思い出す。

ここって“サルス学院”でいいんだよな？

そうだよ。

しつこい様だが、サルス学院 即ち、特別支援学校ってのはあくまで『障害者』のための学校だ。

だからそこにいる生徒ってのは全員が障害者なわけであって、一般の子供と比べれば何かしらの違いが有ることには間違いない。

視覚、聴覚、知的、身体、エトセトラ。

特別支援が必要と考えられる障害ってのはいくらでも思いつく。

だが、それらを考慮した上でも、俺は、先ほどまで普通に会話していた少女に対して、一つの疑問を抱かずにはいらなかった。

「あの娘が……障害者……？」

この時何故か、自分の右腕にいつも以上の重みを感じた。

「……永淵様」

呆然と遠くの建物を見ていた俺に、横から声をかけてくる女がいた。

「あんたか……」

女の名前はゼルダ・ドートリー。ここ、サルス学院にて人事部部長を務めている(らしい)、二十代後半位の女だ。モデルの様な体型を女性用の黒いビジネススーツに包み、右目は黒い眼帯で覆っている。

秘書のようなイメージとミステリアスな雰囲気を漂わす、どっから見ても怪しい女だったが、俺をここに連れてきた張本人でもあった。

「どうかなさいましたか？」

「……いや、別に」

ゼルダにさっきの少女のことを訊いてみようかと考えたが、やはり止めておこう。あの娘が障害者には見えなかったというのは俺の主観ではないわけだし、そもそも必要以上に他人と係わるのは面倒でしかない。

あの娘には「また今度ね」と言われたが、俺はこれっぽっちとして会いたいという気持ちはなかった。

そんなわけで、ゼルダには別の疑問をぶつけることにする。

「今まで何処に？」

「少し、検問の者と話していました」

「検問？」

俺は敷地を囲う白い塀に場違いのごとく備わっている鉄の門扉を指差し、

「あの出入り口っぽいデカイ門のことか？」

「いいえ」

ゼルダは自分が歩いてきた方を指さして言った。

「ここより少し歩きますと永瀧様の職場となる『学院』があります」
「……は？」

「その通り道に、本来身体チェックなどを行うための検問所が設置してありまして、先ほど私はそこにいる者と話して……」

「いやっ、ちよつとタイム！」

今ゼルダが指さしている方向とは別にある、さっきまで俺が眺めていた『SALUS』と書かれている高層建築物を指さして訊く。

「あれが『学院』じゃないのか？」

それは俺が先ほどまでサルス学院の校舎だと思っていた建物。

確かに俺はあの外装から学び舎であることに疑問は感じはしたが、この学院の生徒と思われるさっきの白衣を着た少女はあの中に入っていた筈だ。

「あの建物は『学院』ではなく『研究棟』ですね」

「研究棟？」

「障害の原因やその治療法等を研究する施設となっておりますが、教職の方が関わることはあまりありません」

「……………」

頭の中にある、サルス学院の情報を今一度思い返してみた。

そして真っ先に出てきたのは、サルス学院が通常の特別支援学校と違い、教育機関だけでなく医療機関の二面性も持っているということ。

俺がああの建物を見て最初に感じ取ったイメージは何だったか？

もし遠くにあるあの建物がサルス学院の医療機関としての面なのだとしたら、俺が意識したそれは強ち間違ったことではないようだ。だが、それはそれでまた一つの疑問が生まれる。

……だつたらさっきの少女は何だ？

どうしてあの娘は、ゼルダの言う『学院』ではなく『研究棟』に入ってしまったんだ？

一瞬、あの娘が着ていた白衣のことを思い出し、研究棟と白衣の

二つの単語が俺に一つの可能性を示した。

だが、この答えはあまりにも現実的ではない。

愚直な考えと共に、今後係わるかどうかも分からない子供に対し要らない思考を巡らせたことに「馬鹿か俺は」とだけ口からもらし、俺はこれ以上の疑問をあゝの建物に抱くのを止めた。

あれが研究棟と呼ばれる存在なら、ゼルダの言う通り教職に就くことになる俺とはあまり関連は薄い。既にここが米国の治外法権に依っていることを自覚しているなら、無闇に好奇心を働かせるのは得策ではないだろう。

俺は俺の中で整理をつけ、ゼルダに向き直る。

「よろしでしょうか？」

他に質問はないか、の意味で言ったのだろう。俺は頷く。

そしてゼルダは俺たちが乗ってきた車の方に歩き出したので、俺もそれに続く。一度だけ建物の方を見て一言、あばよと呟いた。

察するに、『サルス学院』はその敷地を大きく二つに分けており、片方に教育機関として機能する『学院』を、もう片方に医療機関として機能する『研究棟』を置いているようだ。この体制が世界中にある他の『サルス学院』にも共通しているかどうかは謎だが、あくまで「生徒の個人情報保護」を盾に様々な内部情報を秘匿する機関である以上、その可能性は十分に考えられる。

そういった盾やサルス学院を囲う白い防壁、さらには「治外法権」という鎧を纏って一体何について研究しているのかは謎だが、特に知りたいとは思わない。

興味がないといえば嘘になるが、それを知ろうとして冒す危険は、それを知って手に入る利益に比べて割りに合うものなのだろうか？ 分からない以上、俺が動く理由は皆無だ。

俺より前にこのサルス学院に来て不祥事を起こしていった馬鹿は、そういった線引きが出来なかったために学院側にその行動がバレた

のだろう。そいつが今どうなっているのかは聞いてないが、治外法権の中で起こした犯罪である以上はアメリカの法で裁かれることになる筈だ。

「……………」
前を歩くゼルダに馬鹿のその後についてを聞こうかと思ったが、変な質問をぶつけると俺が何かを企んでいるのではと誤解されるかもしれないので止めた。それによくよく考えてみたら、この女はもう俺の上司ってことになる。

もしかしたら言葉遣いとかを改める必要があるのかもしれないが、スカウトされた身としてはイマイチそこらへんの上下関係がわからない。

未だに俺のことを「永渕様」と呼んでくるわけだしな。

「永渕様」

…………… ほれみる。

車の前までたどり着くと、ゼルダは俺の方へ振り返る。

その手にはいつの間に取り出していたのか、A4サイズ程の白い封筒を持っていた。

「こちらの資料をお受け取り下さい」

渡されたそれは、紙媒体の資料でも入っているらしく少しばかり重量があった。十枚か二十枚か、冊子程度の枚数分の厚さを手袋越しから感じられる。

先日送られてきた方の資料の中で、学院に関する施設で載せられていたのは職員寮だけだったことを思い出し、もしかしたら学院の施設に関する資料が何かではないかと予想。

「……………」
封をしてある紐を解こうとするその前に、俺は封筒の表面に印字された日本語を目にした。

「なんだこれ？」

そこに書かれていたのは人名だった。

漢字四文字。

『西原日景』

男とも女とも判断し難いその名前を、俺は口に出す。

「……にしはら……につけい？」

「にしはらひかげ、と読みます」

「……漢字は苦手なんだよ」

前にもなかったかこんなやり取り？

紐を解き封筒の中身を取り出すと、やはり二十枚ほどの紙がクリ

ップ止めの状態で入っていた。数枚ほど捲り内容を確認。

「西原日景」 Nishihara Hikage

性別：女 年齢：16 生年月日：……月……日

身長：146cm 体重：36kg 座高：……cm スリーサ

イズ：……、……、……

血液型：B型

……型……型

……値……+……

使われている文章が日本語だったことに若干安堵したが、書かれている内容がパーソナルデータであることに疑問を抱く。名前、性別、年齢、生年月日、身長、体重、座高、スリーサイズ、血液型……その他俺の理解から外れる範囲の身体的情報までもが事細かに記載されていた。

書かれている文章が本当なら、これらはこの「西原日景」という少女のものだろう。

「……なんで俺にこれを？」

十中八九、この資料に書かれている西原日景という少女はこのサルス学院の生徒だ。そうでなければこれ程の個人情報入手するこ

とは難しいし、そもそも書かれている内容が普通の学校が行うような身体測定の域を普通で超えている。

そんな個人情報満載の資料をどうして俺なんかに渡すんだ？

「永洲様には教員の仕事と共にその西原日景の生活管理をしていただきます」

「は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951w/>

SALUS サルス

2012年1月7日00時51分発行